

俺とシノンのお隣さんライフ

ラビ@その他大勢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある世界に、キリトがシノンのフラグを立てるのを是としない少年がいた――

これは、そんな少年がソードアート・オンラインの世界に転生して、詩乃の家の隣に住みながら必死に頑張るお話。

――SAO?知らないゲームですね。

目次

GGOに入る前 取り合えずの小学校

詩乃との出会い 1

詩乃とのゲーム 5

詩乃との約束 8

詩乃との帰り道 11

詩乃との夜更け 15

幸人の検討 18

GGOに入る前 何となくの中学校

詩乃へのプレゼント 21

詩乃の誕生日 24

幸人の回想 28

GGO 原作前

新川との初コンタクト 31

シユピーゲルとGGO 35

クーの初戦闘 39

詩乃とGGO I 42

詩乃とGGO II 45

シノンとGGO 49

シノンの実力 53

遠藤への対策 I 57

遠藤への対策 II 60

遠藤への対策 III 62

シノンとスコードロン戦 65

クーとスコードロン戦 67

第2回B0B

詩乃の不安

詩乃へのアドバイス

幸人と第二回B0B I

幸人と第二回B0B II

幸人と第二回B0B III

詩乃の本音

幸人の迷い

幸人と新川

詩乃への謝罪

幸人と死銃

幸人と準備

原作

クーとキリト

シノンと勘違い

キリトと買い物

シノンとの遭遇

シノンと誤解

シノンと予選

クー対キリト I

クー対キリト II

新川の考え

詩乃と新川

クーと本戦開始

71

74

78

82

85

87

91

94

97

100

103

107

111

114

117

120

124

127

132

134

137

140

GGOに入る前 取り合えずの小学校 詩乃との出会い

「君を間違えて死なせてしまった。お詫びに何でも1つだけ特典付きで君を好きな世界に転生させよう」

「……はあ」

俺が彼の勢いに吞まれて頷くと、そのイケメン——神様は満足げに笑った。爽やかスマイルが妙に堂に入っている。そんな彼に向かって、俺は質問をするべく手を上げた。

「あの……まず今どういう状況なんです?」

とりあえず、状況説明お願いします。

その神様が言うには、俺を間違えて殺してしまったので、何でも1つだけ特典付きで好きな世界に転生させてくれる、というものらしい。どうやら最初の言葉が全てを物語っていたようだ。

不思議なことに、死んだ、と突然言われてもスツと納得できる自分がいた。普通なら混乱したり信じなかつたりするだろうに。やはり自分のことは何となくでも自分で分かっている、ということか。

因みに、この時点で俺は既に行きたい世界を決めていた。そこは《ソードアート・オンライン》というラノベの中の世界である。俺にとっての、理想の世界。前世で、二次元、三次元含めて唯一心から好きになれた《彼女》の居る場所。

「じゃあ、行く世界はソードアート・オンラインの世界」

問題は特典だが、そんなのは——

「特典は、小学四年生の4月にシノン——朝田 詩乃の家の隣に引越すこと、で」

推しキャラのお隣さんに限る。俺は不敵にニツと口角を上げた。神様が少し意外そうな顔をする。

「珍しいね。大体無双系能力とか最初から好感度マックスとかをいう人が多いのに。それに時期まで指定する子なんて初めて見たよ」

そう言つて首を捻る神様を見て、それでも別に良いけど、と俺は肩を竦めた。

「それじゃあ、面白くないでしょ？ それに——」

そんな仮初めの好意……貰つたつて嬉しくない。

そう口のなかで呟いた俺を再び意外そうな表情で数秒間見詰める
と、神様はフツとシニカルに笑い、仰々しく頷いた。

そして、手に何処から取り出した杖を握ると、それを俺にかざす。

「良からう。汝の願い。聞き届けた」

こうして、俺——工藤^{くどう} 幸人^{ゆきと}は転生した。

——と言つても、物心つく前のことは全く記憶に無く。この人生での俺の記憶は、幼稚園から先のみだ。

そして、運命の時。小学四年生の4月。

親父の転勤により、俺達工藤家は家族全員で田舎の方に引っ越すことになった。

——そう、特典通り、朝田 詩乃……《シノン》の家の隣へ。

「来たばかりで疲れているかもしれないが、お隣さん方に挨拶しに行くぞ、幸人」

「はい」

俺が荷物を詰めたりリュックを二階にある自分の部屋に置いて、一息つこうと予め運ばれていたベッドに腰掛けた時、下から親父の声が聞こえた。

「いよいよか、と期待しながら体を起こして部屋を出ると、俺は階段を駆け降りる。

お隣さん方、と言つてもこの家の隣にあるのは駐車場と朝田宅のみ。挨拶する相手は1つしかない。

「どちら様ですか？」

親父が朝田宅のインターホンを鳴らすと、すぐに幼い少女の声が応じた。精一杯大人っぽく言おうとしているのか、少し話し方に無理を感じる。

そういえば——、と記憶の中の原作知識を手繰る。この頃の詩乃は、確か精神が逆行した母親を一人で庇おうと必死になっていたはずだ。

少女の声だったことに少し困惑していた親父と母さんは、顔を見合わせるとすぐに表情を緩め。

「お隣に引越してきた工藤です。ご挨拶に来ました」

そんな態度の両親に安心したのか、安堵の息を吐いた気配がした後、インターホンはブツリと音を立てて切れた。暫くすると朝田宅のドアがゆつくりと開く。

顔を覗かせるのは、幼い少女。SAOのヒロイン、朝田 詩乃をそのまま小さくしたような外見をしていた。

二次元を三次元に起こす際に有りがちな違和感が驚くほどに無い。くつきりと整った目鼻立ちに、綺麗な黒髪。そして——

(あれ? 眼鏡は掛けてないのか)

この時は近眼じゃなかったとかそういうアレだろうか。

——いや、違う。頭の中の知識を懸命に引っ張り上げる。

(眼鏡は確かあの事件の後に心を安定させるために防具として特注するんだっただけな……)

あの事件は確か小学五年生辺りに起きたはずだ。

俺がボーッと視線を詩乃に向けながらそんな風に考えを巡らせていると、母さんが俺を見てクスクスと堪えきれないように笑った。

「あらあら、幸人ったらこの子に一目惚れでもしちゃったのかしら」

「ち、ちげーしー!」

慌てて顔を紅くしながらも弁解して、ハッと気付く。

——反応が小学生みたいになってしまった!!

見た目的には小学生なのだから実際は問題ないのだが、中身を考えてると余りにも子供っぽい反応をしてしまったことに、更に顔を紅くして俺は俯いた。

そんな俺の態度をどう受け取ったのか、さらに優しい笑みを浮かべる母さん。

ふと、クスクスという小さな声が漏れた。そちらへ目を向けると、

詩乃が口元を手で隠し、肩を震わせて笑っている。

——可愛い。

俺がそんな彼女に見惚れていると、詩乃はこちらへと歩いてきてペコリと頭を下げた。

「朝田 詩乃。よろしく」

「えっ、あつ、おう。俺は工藤 幸人。よろしくな、詩乃」

そんなこんなで、俺と彼女——詩乃のお隣さんライフが始まったのだった。

詩乃とのゲーム

引越しの挨拶に行ったその日の夜に、詩乃の祖父母がこちらへと挨拶に来た。——いや、まあそんなことはどうでもよくて。

その翌日、俺は再び朝田家のインターホンを鳴らしていた。——勿論、詩乃と親睦を深めるのと、引越してきたばかりのため一緒に遊ぶ相手が居ないからだ。インターホンから聞こえたのは、昨日も聞いた幼いながらも透き通った声。……詩乃だ。

「どちら様ですか？」

「あの——幸人です。今、遊べるかな？」

すると、少しの空白があり。詩乃は訝しげにこちらへと訊ねてきた。

「何だよ」

「折角家が隣なんだし、詩乃しか知ってる子いなくて」

すると、詩乃が暫く躊躇うような気配がして。彼女が漸くなにかを言おうと息を吸ったとき、後ろから少し囁れた老人の声が聞こえた。

——詩乃のお爺さんだ。

「おお、お友達か。折角だし、入ってもらいなさい」

もしかしたら、自分の孫に友達がいなかったことを彼なりに気にしていたのかもしれない。彼の言葉に詩乃は固まってしまったが、結局、お爺さんの言葉に逆らえなかったのだろう。インターホンが切れる音がしてすぐに、朝田宅のドアが開く。

「入って」

年齢のわりにかなり無愛想だな……と苦笑しながら、俺は頷いた。靴をしっかりと揃え、玄関に上がる。無言でずんずんと進んでいく詩乃の背中を俺は慌てて追い掛けた。

詩乃の個室は——何というか、実に詩乃らしい部屋だと思った。小学生の女の子っぽく可愛いものが飾り付けられていない、必要最低限の実用品が並べられているだけの殺風景な部屋。唯一目立つのは、沢山の本が並べてある大きめの本棚くらいか。

「で、何」

詩乃がこちらをしつかりと見詰めてくる。

「遊ぼう……ってことなんだけど……」

俺が苦笑いを浮かべながら肩を竦めると、背負ってきていたリュックから『それ』を二つ取り出した。『それ』——旧式の持ち運び用のゲーム機だ。カセットには、当時人気だったレーシングゲームをセットしてある。

それを一目見て懐かしさから誕生日プレゼントとして買って貰ったのは一昨年の6月。あの時、『通信できた方が面白いだろう』と言って二つ目を買っていた親父が、後で母さんに、無駄遣いをするな！と怒られていたのは未だに記憶に残っている。

そのゲーム機を手にとって、詩乃はふーん、と呟いた。興味がなかったかな、と俺が聞こうか迷っていると、詩乃は片方のゲーム機を手に取り、こちらを見詰める。ふ、と詩乃の表情が和らいだ。

「……じゃあ、プレイ方法教えてくれる？」

「……勿論！」

俺は、前世も含めて人生最大の笑顔を浮かべたのだった。

因みに、このレースゲームの結果は。

初めの方こそ慣れていた俺が勝っていたものの、詩乃もなかなかのセンスを見せて。途中からは完全に同レベルくらいになっていた。

ぐぬぬ……流石は半年でGGOのトッププレイヤーになるだけはある。習得速度が半端ない……。

俺が、詩乃がレースゲーム中に不意に見せる心からの楽しそうな笑みを見て、改めて彼女に惚れ直したのは、また別の話。

お隣さん——幸人が私の隣の家に引っ越してから、数ヶ月経った。彼は学校でも実生活でも変わらず、私——朝田 詩乃に話し掛けてきている。

何故だろう。彼の明るめな性格や雰囲気からして、私みたいな無愛想なやつと話す意味など何もないだろうに。私と話すくらいなら他の明るい人達のグループに混じって遊ぶ方が楽しいだろうに。

嫌な方向へ思考が向いていることを自覚しながら、私は家を出るべくランドセルを背負った。ずしりと重いランドセルの中には、教科書以外にも読みかけの小説や予備用の小説を入れてある。長く読めるように少し厚い本を選んであるので、他の人よりも私のランドセルは膨らんでいる。

「じゃあ、行ってきます」

返事を待たずにドアを開けると、今日も幸人はいた。六月の風に吹かれる雲を見上げ、私の家の前にある電柱にもたれ掛かっている。ドアが開いた音に反応して、ピクリと肩を震わせると、首だけを回してこちらを向く。そして、私を見つけるといつものように微笑んだ。

「……行こうか」

私は、何も言わずにふいっと顔を逸らすと歩き始めた。幸人も、無言で隣に並ぶ。特に何を話すでもない、ただの登校。

——だが、不思議と私は、こういう穏やかさにありがたみを感じていた。

詩乃との約束

詩乃の家の隣に引っ越してきてから、一年以上が経ち。小学五年の夏休みが終わって二学期が始まってからも変わらず俺は詩乃と登校し続けていた。引っ越してきてから最初の数ヶ月こそ、異性同士と一緒に登校してくることを冷やかしてくる小学生もいたが、すぐに飽きたらしい。今となっては『ああ、今日も一緒に登校してるな……』等という雰囲気クラスに流れている。

今日も今日とて詩乃が出てくるまで俺が風に流される雲を眺めていると、ドアが開くガチャリという音が聞こえた。目をやると、相変わらず美少女な詩乃が大きく膨らんだランドセルを背負っている。

——相変わらずって言うか最近、さらに綺麗になつてきてるよな……。

元々あった大人びた雰囲気が更に磨かれているように感じる。心なしか、胸も……こほん。

「じゃあ、行きましょう」

俺がそんなことを考えていると、いつの間にか先に進んでいた詩乃は通学路で俺を待っていた。おう、と慌てて返し、走って追い掛ける。

脳裏に過るのは、『あの事件』に関する情報。あれが起こるのは……二学期が始まってすぐの土曜日、だ。

「なあ、詩乃」

前を歩いていた詩乃に呼び掛けると、詩乃は立ち止まってこちらへと振り返り、可愛らしく小首をこりん、と傾げた。

「なにこ？」

「ああ、いや。何でもない」

——土曜日、郵便局に行くなら注意しろよ——

なんて、言えるわけもなく。俺は曖昧に笑って誤魔化すと、再び空を見上げて長い溜め息を吐いた。

白濁とした雲に覆われた空は、まるで俺の心を表しているようだった。

闇。

黒く深い、全てを呑み込むような闇の奥に、郵便局に現れたあの男の顔が浮かんだ。だが、次の瞬間、男は頭から血を吹き出す。額には、小さな痣のようにすら見える……傷。男の顔から表情が消える。

だが、不意に男はこちらを向いた。底無し沼のような瞳孔がこちらを——詩乃を捉える。震える私の手に……銃が握られていた。

私は飛び起きた。心臓が異常な速さで鼓動を刻む。大量の汗が頬を伝い、いつの間にか固く握りしめていた拳に落ちる。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

近くで聞こえる荒い呼吸が誰のものか、少しの間分からなかった。漸く落ち着き、未だにびつしりと汗が滲んでいる額を腕で拭う。体に張り付くパジャマが気持ち悪い。

辺りを見回す。あの事件の後に数日間、隔離されていた病室ではない。見慣れた、自分の部屋だ。壁にかけてある時計を見ると、まだ朝の3時。起きるには早すぎる時間だが、もう一度寝る気にはなれず。私はベッドを降りて、せめてこの気持ちの悪い汗を落とそうとシャワーを浴びに浴室へ向かった。途中、足の力が抜けて幾度となく倒れかけたが、何とか堪えた。

冷たい水が、生ぬるい汗を流して熱く火照った体を冷やす。私はシャワーを浴びながら、目を強く瞑る。

(明日から……学校……)

この時は、明日——いや、今日から段々いつも通りの生活に戻っていくものだと思っていた。学校に行つて、少ないが居ないわけではない友達と話したり、本を読んだりして忘れよう。そう、思っていた。だが。

——そう現実には甘くなかった。

「おはよう」

私がランドセルを背負って家を出ると、今日も幸人は雲を見ていた。いつも通りの彼の姿に、何だかとても安心してしまう。だが、幸人は何時ものようにすぐ出発せず、こちらの顔を覗き込んできた。思わず一歩下がりがかけたが、幸人の瞳に心からの心配が色濃く見え、踏みとどまる。

「大丈夫か？ 詩乃、眠れてないんじゃないのか——あ、いや。悪い。無神経だった」

すまなそうに俯く幸人に、肩をわざとらしく竦めてみせる。

「……別に良いわよ。気にしてないから。嫌な夢を見ちやつて眠れていないのは本当だしね」

実際、そんなに気にしていなかった。何かは言われるだろう、と思っていたから、むしろ予想できていたほどだ。幸人は頭の辺りで腕を組むと、そっか、と呟いた。そして、冗談めかしてこちらを向いて笑う。

「じゃあ、今日は一緒に寝るか？」

「な、何だよ」

幸人の言葉に動揺してしまい、声が震えるのを自覚する。

「いや、一緒に寝たら悪い夢なんて見ないだろう？」

もしかして、からかわれているのだろうか。

私は少しむっつとして、だが、すぐに笑みを浮かべた。

「じゃあお願いしようかしら」

「えっ、ええっ!？」

驚く幸人の顔を見て、私は満足げに頷くと、「冗談よ」と言おうと口を開く——前に、幸人が顔を紅くして俯く。

「よ、よろしくお願いします」

しまった、と内心で頭を抱える。撤回できる雰囲気じゃなくなってしまった、と。

詩乃との帰り道

学校についた私は、通学路の辺りからチリチリと感じていた奇異の視線がいつそう強まったのを感じて顔をしかめた。登校してからというもの、クラスの皆は遠巻きに私を見るだけで、誰も話し掛けようとしてこない。どうしたのか、と聞こうと一歩踏み出すとそそくさと逃げられる始末だった。

隣の席に座る幸人が不快そうに目を瞑り椅子を前後に揺らす。私は本を読む気分にもなれず、ただ窓際の席から頬杖について外を眺めていた。

学校終了のチャイムが鳴ると同時、私は逃げるように教室を出た。これ以上あんな不快な視線を受けなくなかったのだ。そんな私を見て、慌てた様子で幸人が帰る用意を始めたのを尻目に、目を伏せて心なしかいつもより暗く感じる廊下を歩く。

そのまま振り返らずに学校を出たところで、漸く幸人が隣に並んだ。走ってきたのか、息遣いは少し荒い。

——結局、学校ではずっとあの視線を感じていた。クラスメイトは皆が私を避け、遠巻きに奇異の視線を向ける。たまに聞こえたクラスメイトのひそひそ話からは、『人殺し』だの『殺人者』だのが聞こえ、漸くどういう理由で先程まで避けられていたのかが分かった。

(私は、間違ってる……ない)

唇を強く噛み締める。私がもし過去に戻ってあの事件をやり直したとしても、全く同じことをする自信がある。母を守るためには、あするしか無かったのだ。

(幸人は——どう思っているの……?)

チラリと横目で幸人を確認する。彼だけは、クラスメイトとは違った。休み時間もいつも通り話し掛けてくれたし、彼が話す時にあえて『あの事件』に関する話を避けていることも分かった。

幸人は——他の人とは違う。

……でも、だからこそ。彼が何を考えているのかが読めなかった。
……悪いやつじゃないのは分かるけど、と再び彼に目をやる。幸人は、空を眺めながらただ黙々と歩いていった。

——聞いてみようか？

そんな考えが頭に過った途端、私は口を開いていた。

「——ねえ、幸人」

「……ん？」

幸人がこちらへと顔を向ける。そんな彼に、『あの事件』についてどう考えているのか聞こうと口を開く。

……だが、私は結局、何も言えなかった。

それが何故か、少し考えただけですぐに分かった。

怖かったのだ。幸人までもが私に『殺人者』のレッテルを張り、軽蔑の視線を向けるかもしれないのが。実際、そんなことをしないだろうことは今までの幸人を見ていて分かつてはいたが……それも、絶対とは言い難い。もし、幸人まで私を否定したら——そんな風に考えてしまったのだ。

声を掛けるなり黙ってしまった私を心配そうに見る幸人に、「何でもない」と首を振って誤魔化すと、私は先程の幸人のように空を見上げる。

私の迷いとは裏腹に、雲一つ無い空は青々と広がっていた。

運命の夜。——と言つても、詩乃と一緒に寝る夜、というだけだが。勿論、無意味にサービス回にならないように、お風呂は既に自宅に入っている。

「お風呂上がったわよー」

彼女の祖父母に向けたのだろう、大きめの声がドアの外から聞こえてからすぐに詩乃が部屋へと入ってきた。先程お風呂から上がったばかりらしく、その体からホクホクと湯気を立てている。詩乃は自分のベッドへと座ると、首に巻いたタオルでまだ少し濡れている髪を拭いた。そして、こちらにジト目を向ける。

「……で、何でこんな早い時間に来るのよ」

そう、今はまだ夜の七時。暗くなるのが遅い夏とはいえ、既に日は暮れている時間帯だった。寝る時間まで、軽く三時間はある。

俺は読んでいた本から顔を上げると、首を傾げた。

「確かに……何でだろうな」

一応理由はあったが、それは詩乃に話すようなことではない。だからわざとらしく惚けてみせた俺を見て「……はあ」と詩乃は呆れたようにため息をつくど、

「特に用がないなら帰りなさいよ」

……わお、手厳しい。俺は言い訳を探して視線を宙にさ迷わせる。

「……あ、そうだ!! 宿題教えてもらおうかなって」

「……あんたの成績学年トップレベルじゃない。私が教えられることなんて何も無いと思うけど」

確かに……と自分で納得してしまう。——因みに俺は、小学校のテストでも前世の記憶をフル活用して解いていた。まあ、当たり前に小学校のテストなんか間違えるわけもなく成績は大体が最高評価である。

少し首を捻り、再び言い訳を探す。

「えっと……その……ほら……あれだよ、うん」

「あれって何よ」

「……」

詩乃の追求に何も言えず、黙って俯いてしまった俺の耳に届いたのは、クスクスという笑い声。顔を上げると、詩乃が手を口に当てて微笑んでいた。

「冗談よ。……心配して早く来てくれたんでしょ? ありがとう」

どうやら詩乃には早めに来た理由がバレていたようだ。流石、と笑って肩を竦めると、俺はリュックからいつもの携帯ゲーム機を2つ取り出す。詩乃に片方を放ると、俺は早速電源ボタンを押してゲームを起動した。中に入れてるカセットは、ここに引っ越して来たばかりの時に詩乃と初めて二人でしたレースゲーム。

「今夜は寝かさねーぜ?」

「……寝させないって……。あんだ、何のためにここに来たのよ」
ニヤリと笑う俺を見て呆れ気味に首を振りながらも、詩乃もゲームを起動させた。

詩乃との夜更け

詩乃と二人でベッドに座り、通信対戦という名の熱い夜を過ごしていると、不意に詩乃が操縦していた車が動かなくなった。続いて、俺の肩にコツン、と何かがのせられる。そちらへ目を向けると、俺の肩に頭をのせた詩乃が目を瞑り、すうすうと規則正しい寝息を立てていた。いつも大人びて見える詩乃の、年齢に合ったあどけない寝顔を見て、俺は思わず頬を緩ませる。

(寝れてないって言ってたもんな……)

詩乃を起こさないように注意しながら、ゲーム機の電源を2つとも切る。次に、俺はなるべくゆっくりと詩乃を抱き抱えてベッドに寝かせた。勿論、毛布を掛けておくことは忘れない。

「……と。こんなもんかな?」

ゲーム機をさっさとリュックに片付けると、俺は軽く伸びをした。長時間座りっぱなしだったため、背中がパキパキと音をたてる。時計を見ると、まだ8時半。

寝るには早すぎる時間だ。

(でも電気を点けたままにしとくのもなあ……。詩乃が眩しそうだし)

……久し振りに早寝するのも良いかもしれない。そんな風に考え、さて布団を敷こうかと室内を見回す……が。

布団……無いなあ。

「仕方無い……か」

俺は、部屋の端に置いてあった詩乃のクッションを部屋の真ん中に移動させて、そこに頭をのせた。電気を遠隔操作のリモコンで消して目を瞑ると、やはり疲れていたのだろうか、すぐに眠気が襲ってくる。俺はその心地よい眠気に体を任せた。

ドシン、という衝撃で目が覚めた。その衝撃が、詩乃が俺へとのし掛かるような形で抱き付いてきたためのものだ、と気づくのには数秒かかる。

「どうしたん——」

寝ぼけた頭で呑気にそんなことを聞こうと詩乃の肩に手を置いて——俺は、続く筈の言葉を飲み込んだ。……否、飲み込むしかなかった。

詩乃の華奢な肩は、カタカタと小刻みに震えていた。乱れた吐息が、荒々しく繰り返される。彼女の体温が、酷く低く感じられた。詩乃は、俺の胸へと顔を埋めて震える声で小さく呟いた。

「お願い……このままで居させて」

初めて見るような詩乃の弱々しく怯える姿を見て、俺が断れるわけもない。天井を見上げながら、ぽんぽん、と柔らかく詩乃の頭を叩く。そんな俺の態度に詩乃は少し安心したのか、深く息を吐いた。

そんな風に詩乃の頭を撫でながら、ふと考える。

なんで——俺は詩乃が郵便局に行くのを止めなかったのだろうか。

《あの事件》が起きて、その後詩乃が苦しむことを分かっていたいながら。止めようと思えば、いくらでもやり方はあった筈だったのに——目を瞑り、強く唇を噛み締める。自責の念に刈られる。

……俺に——分かっていたのに詩乃を苦しめた俺に、詩乃と関わる権利なんて有るのだろうか、と。

もう一度、詩乃を見る。未だに震えている……俺の大切な人を。俺は頭を撫でるのをやめ、詩乃を強く抱き締める。そして、誰にも聞かえないような小さな声で呟く。——それは、ただの決意。

「大丈夫——絶対、守るから」

そう言つて、俺は目を閉じた。

「大丈夫——絶対、守るから」

その言葉は間近にいた私すら聞き逃しかけるほどの小声だったが、何故かはつきりと耳に届いた。途端に私の心に何か暖かいものが広がった気がした。唇を小さく動かす。

「ありがとう」

幸人からは既に寝息が漏れていたもので、聞こえることはないだろう。私は小さく微笑むと、幸人を強く抱き寄せる。人の温もりに、体

の強張りがとけていく感覚があった。

その夜からは、もうあの夢は見なかった。

幸人の検討

とある休日。

「んー……違う。これじゃ詩乃が危ない可能性がある」

俺はタイピングをしていた手を止めると、さっきまで打ち込んでいた文字を全て消去した。

——俺が今、何をやっているのかというと。

「んー……つと？ よし、前提条件から考え直すか。SAOとALOは原作改変はない。これは確定だ」

一言で言うと、検討。

——まあ、それだけだと伝わりきらないだろうから補足すると。『俺が存在することによって、どこまで原作が改変され、どこまで原作通りに進むのか』そして『その原作改変によって、何が起こるのか』を考えているのだ。

SAOとALO編については、俺がキリト達と一切関わっていない以上、改変が起きることは無いはずだ。……もしあつても詩乃と関係ないだろうから知らん。

問題はGGOなのだが。

原作通りなら、GGO編のラストで詩乃が変態……もとい新川くんによって襲われ、それをキリトが助ける——という流れになっている。……しかし。

(それだと詩乃がキリトに好意を向けかねないしなあ……)

それは断固回避したい事態だ。何なのキリトくん。何であんなにモテるんだ！主人公だからか！……主人公だから……なんだろうなあ………つて、そんな話をしたいんじゃない……コホン。

——というわけで、俺が新川くんを撃退しなければならぬわけだが。

そこまで考え、何とはなしに自分の体に目を向ける。小学生のくせに外で余り遊ばなかったため、かなり貧弱な肉体。一般的にモヤシとかそつちのカテゴリに分類されるだろう。このまま高校生まで育つても変態を撃退するどころか変態に殺害されかねない。

「体……鍛えなきゃ……」

——もし体を鍛えるならどんなものが良いだろうか？

(新川くんを撃退するため……だから、普通に考えて武道かな。——
ああ、でも毒使ってくるなら接近系以外か)

一人首を捻る。そして、一つの名案が思い浮かんだ。

「そうだ、剣道やろう」

後で親に頼んでみよう。と俺はそんなことを考えた。

「むー……。一応剣道やるのは確定だとしても……前提として新川くんをどうにかしたいんだけどなあ」

俺は一人、首を捻る。結局、俺の意識は朝から考えていたそこへ向かってしまう。一番良いのは詩乃が彼と接触しないこと……だが。

(それはシノンを見れなくなるしアウト……)

詩乃も超絶可愛いがシノンも超絶可愛い。あの美少女を見ないと
というのは俺が生きてる意味がない。かといって俺からGGOに誘う
というのも……

「……ん？　もしかして行けるかも？」

『トラウマ克服』を言い訳に詩乃と一緒にGGOに入る——それなら、
詩乃に危険は及ばない……筈だ、うん。新川くんとの接点なくなる
し。

唯一、危険が及ぶ可能性があるとすればシノンがBOBのエント
リーの際に可視状態でウインドウを操作してしまうことだが、そこは
俺が頑張ってフオローするしかない。

ああ、でももし出来るならGGOを始めるまでに——

「告白……したいなあ」

OKを貰えるかどうかは俺視点ではかなり微妙なところだと思う
が……可能性はゼロじゃない、はず。このことを考えると決まって弱
気になる自分に軽く苦笑してしまう。

もしOK貰えたら……。

告白もしていないのに一人、詩乃とのイチヤイチャを想像して悶え

っていると、不意に。ガチャリという音を立てて部屋のドアが開いた。悶えるのをやめ、恐る恐るそちらへ目を向けると——床にのたうちまわって悶えていた先程までの俺を見ていたのだろう、ドン引いた表情の詩乃が立っていた。——後で聞いた話だと、勉強で分からないところがあったから聞きに来たらしかった。

「幸人——あんた、なに、やってんの……？」

「えっと……その……あの……」

「……お邪魔しました」

「待つて！ お願い！ 話を聞いて！」

ボタン、という無情な音と共にドアが閉められる。俺は慌てて、言い訳をするために詩乃を追い掛けた。

GGOに入る前 何となくの中学校 詩乃へのプレゼント

「んー……」

とある休日。近所のデパ地下、ファッション関係の店が並ぶ大通りに、居心地の悪さから忙しくなくキョロキョロと辺りを見回す中学生の少年——俺の姿があった。さて、こんな場違いの場所で俺が何をしているのか、というところ。

「さて、詩乃に何を贈ろうかな……つと」

——そう、詩乃へのプレゼントの選定である。

詩乃の13歳の誕生日が間近に迫った土曜日。俺は一人、うろろろとデパ地下を徘徊していた。

というのも、詩乃に送るための良いプレゼントが見付からないのだ。去年もその前の年もプレゼントとして贈った長編小説は、反応はそれなりに良かった——が、同じものを贈ってばかりでは誠意が無いと感じられかねない。なので、今年に限っては小説は最終手段だ。

だが、小説以外を贈ると決めたからといって「これだ!」というプレゼントが思い浮かんだ訳ではない。

——と言うわけで、沢山のものが揃っているデパ地下へとやってきた訳だ。

周りの女性率が異常に高いため居心地が悪く、ずっと俯いたまま肩を縮めて歩いていると。不意に、小洒落たアクセサリーショップが俺の視界に飛び込んできた。何となく店に入り、一つ一つのアクセサリーを物色する。

「ううむ……髪飾り……ネックレス……詩乃に似合いそうなの……」

「お客様、何かプレゼントをお探しでしょうか？」

「うひゃい!？」

突然背後から声を掛けられ、素っ頓狂な声を上げてしまう。俺が慌

てて振り向くと、店員さんらしきお姉さんが目を丸くしていた。俺が急に変な声を上げてしまったため、驚いたようだ。

店員さんは気を取り直すようにコホンと咳払いを小さくして、改めて大人っぽく微笑む。

「何かプレゼントをお探しでしょうか？」

「えうっ……その……はい」

あまり年上の女性と話すことがない俺が吃りながらも慌てて頷くと、店員さんは小さく首を傾げた。

「どんな人に贈るんですか？」

「えっと……大切なおん……じゃなくて、大切な人にです」

「ふふっ。分かりました」

大切な女の子——そう言いかけて慌てて言い直す。そんな俺を見て、店員さんは何かに納得したように暖かく微笑んで頷くと、手近なところにあつた銀色のネックレスを手に取る。

「えっと……そうですね——はい、これなんかどうでしょう。銀色は大体どんなものにも合うので、女の子へのプレゼントにはぴったりだと思いますよ。それに、値段もそこまで高くないですし」

そう言つて差し出してきた値札を見ると、三千円弱。

——まあ、一応お手頃といえばお手頃な値段ではある。財布の中身を見ると、軍資金は四千円。

——うん、買える。

「あ、それじゃあそれお願いします」

「はい、毎度ありがとうございます」

店員さんに改めてプレゼントを選ぶ手伝いをしてくれたことについてのお礼をしてから、俺はアクセサリーショップを後にした。

換気のために部屋の窓を開けると、入ってきた穏やかな朝の風が頬をうった。

今日は私——朝田 詩乃の誕生日だ。幸人は今年も小説をくれるのだろうか。——まあ、確かに幸人がくれる小説も面白いのは面白いのだが、そろそろ別のプレゼントも欲しい……なんて。

ふと過つた変な思考を頭を振って吹き飛ばす。取り敢えず、貫うま
で楽しみにしておこう——そんなことを考えながら、私は小さく微笑
んで窓の外に広がる青空を眺めた。

詩乃の誕生日

「……すみません、料理までご馳走になってしまつて」

「いえいえ、詩乃も幸人くんに手料理を振る舞えて本望でしょうから」「ちよつと、お婆ちゃん!! 変なこと言わないでよ」

お婆さんの言葉に詩乃は顔を紅くしてテーブルを叩いた。俺はどんな風に反応すればいいのか分からず、顔を俯かせて、白い湯気を上げる肉じやがを黙々と口に運ぶ。

学校の授業が全て終わり、帰宅後。詩乃に誕生日プレゼントを渡しに詩乃の家を訪ねたところ、詩乃のお婆さんに「おや、良いところに来たね。今丁度晩御飯を作っていたところなの。詩乃が作った肉じやがもあるし、是非食べていきなさい」と半強制的に夕御飯に招かれた。

いや、まあ詩乃の料理は一度食べてみたかったからむしろ歓迎するほどだったが。

因みに、詩乃が一人で作ったという肉じやがは普通に美味しかった。感想を求められたので「良いお嫁さんになれるな」と答えたら詩乃に怒鳴られた。……割りと真面目に褒めたのに。

と、不意にずつと黙々とご飯を食べていたお爺さんが真剣な顔になり、俺へ向いて口を開いた。

「ああ、幸人くん。少し話があるのだが……この後時間はあるかね?」

「……あ、はい。特に何もありません」

「うむ。なら後で私の書齋に来て欲しい」

俺は首を傾げながらも頷く。……と言うのも、俺と詩乃のお爺さんに直接的な接点は殆ど無い。そのため、話の内容が推測できないのだ。その真剣な表情から、怒られたりすることは無さそうだが……。

食後。詩乃のお爺さんの書齋にて。俺とお爺さんは椅子に座って向かい合っていた。

「話というのは他でもない。詩乃についてだ」

「……はあ。詩乃について、と言いますと？」

取り敢えず頷く。詩乃抜きで詩乃の話をする事には少し違和感を感じたが、まあこういうこともあるだろう。お爺さんはコホンと軽く咳払いをして、姿勢を正した。

「実は、つい先日な。詩乃が上京して専門学校へ行く、等と言いだしたのだ」

「……はい」

「勿論、詩乃には確りとした大学を受けてほしいのだが……。如何せん、学校にも余り馴染めて無いようだな。専門学校へ行くことについては絶対に行かせるわけにはいかないが、東京へ行くこと自体は止められないのだ」

そこまで聞いて、俺は「なるほど」と内心で頷いた。

つまり彼は、俺に詩乃が東京へ行かないように説得してほしい、ということなのだろう。詩乃を呼ばなかった理由も説得のお願いという事なら納得できる。

——だが、続く言葉は予想の斜め上を走っていた。

「と言うわけで、だ。君にお願いしたいのは——」

『詩乃と一緒に上京して欲しい』ということなのだ」

「……へ？」

呆気にとられる俺を見て、お爺さんは慌てたように首を横に振る。

「勿論、強制力など一切無い。……だが、私達と面識があり詩乃の彼氏である君も東京へ行ってくれば私達にとってこれ程安心できることは無い」

「……え？ ……いや、僕と詩乃は……別に……付き合ってるとか、そう言うんじゃないくて」

辿々しく呟いて俯く俺に、お爺さんは何に驚いたのか目を丸くした。

「おや？ 詩乃とはまだ付き合ってたのかね」

（『まだ』ってどういうことですか……？）

少し引つ掛かる箇所があったものの、心の中の呟きを口に出すような愚はおかさない。小さく頷いて、口を開く。

「詩乃とは今付き合ってます。……それに、僕の両親が了解してくれ——」

「ああ、それなら問題ない。君のご両親には既に御了承を頂いている。後は君の心次第だが……」

俺の言葉を遮って、お爺さんが頷く。

どうなってんだ、俺の親。放任主義にも程があるだろ……。何か勝手に裏で話が進められていた。

まあ、結局は——俺の気持ち次第。……勿論、詩乃と離れたくはない。それに、詩乃を一人で東京へ行かせるのは危なすぎる。色々な意味で。しかし——

そんな風に考えてから、俺はこんな大事なことについてでさえ損得勘定を行おうとする余計な思考を吹き飛ばすために勢いよく頭を振った。そして、お爺さんに向き直って立ち上がり、頭を下げる。

「俺も詩乃と一緒に東京へ行かせてください」

何も迷うことはない。俺は詩乃が好きだ。——だから、ついていきたい。

俺の言葉にお爺さんはフツと表情を緩めると、椅子から立ち上がった。「うむ」と満足げに頷くと、

「話は終わりだ。……幸人くん、ありがとう。」

——詩乃を頼む」

頭を下げたままの俺に、すれ違いざまに呟いた。

お爺さんが部屋を出る気配がして、数秒。俺は頭を上げ、緊張で強張っていた肩を解しながら深く息を吐いた。

「つーか、これって客観的に見たら俺……詩乃のストーカーみたいじゃん……」

——ま、まあ……両方の保護者が了解してくれてるならストーカーにはならない……ならないよね？

「詩乃、誕生日おめでとう」

俺がネックレスを包装した箱を詩乃に渡すと、詩乃は箱の細長い形

を見て意外そうに目を丸くする。

「……今年は本じゃないのね」

「まあ、毎年同じプレゼントってのもどうかと」

気恥ずかしさから目を逸らしながら笑うと、詩乃はクスリと微笑んだ。

「ええ、そうね。——今開けても良い？」

「……ん。喜んでもらえるの良いんだけど」

俺が頷くと、詩乃は慎重に箱の包装紙を剥がし、中に入れていた銀のネックレスを取り出した。小さく感嘆を洩らし、部屋の灯りに掲げる。シンブルなデザインのネックレスは、光を反射してキラキラと輝いていた。

「ど、どう??」

「……幸人、ありがとう。——大切にに使わせて貰うわね」

詩乃はそう言って大事そうにネックレスを胸に抱いた。

幸人の回想

中学二年の夏に、俺は剣道をやめた。

一応真面目にやっていただけあって地方の中でも上の下くらいには強かったので、剣道をやめると言った時には師範に少し残念がられたが……。剣道を始めた目的——筋肉をある程度つけることや、新川くん、別名変態さんの撃退に対する戦闘練習等——は想定していた条件を達成できたので、これ以上特に目的もないままやり続けるのもどうかと思ったのだ。

それに、『Alfheim Online』——通称、ALOの発売が間近に迫ったことも大きかった。俺は取り敢えず、将来絶対に参加するであろうGGOの前準備として、VRMMOの練習のために安全が確実に保証されているこのゲームを買うことを決めていた。高校生にもなっていない俺にとっては決して少ない出費ではなかったが、長年コツコツと貯めていた貯金の八割をはたけばアミュスフィアとALOのカセットの両方が買えることは既に計算済みだ。

——そして始まったALOでのケットシー生活。俺はそこで過ごした一年間半くらいの間に、ケットシーの領主様であるアリシャ・ルーに領主親衛隊として雇われたり、シルフとケットシーの合同試合とか何とかで何故かリーファと一対一のデュエルをしたり、シルフとケットシーの会合で原作通りに起こったキリトとユージーン將軍のデュエルを見たり、キリトを助けるためにケットシーの軍隊に《竜騎士隊》へと呼ばれて世界樹を攻略したりすることになるのだが……。この話は詩乃と全く関わりが無いので少し省略したいと思う。

男の猫耳とか割りと真面目に需要ないし。それに結局、ALO内ではキリトとコンタクト取れなかったし。

そして、時は現在、中学三年の三月。本日あった志望校の合格発表

で無事両方の合格が判明し、俺と詩乃は東京の駅の近くにあるファストフード店で軽い『お疲れ様会』のようなものを開いていた。

——因みに、2020年代になっても合格発表に掲示をしている学校は数こそ減少したものの無くなってはおらず、実際に俺たちが受けた高校の合格発表は掲式式だった。全く、遠いところからわざわざ来なければならぬこちらの身にもなってほしいものである。

「……ほんつとに便利な頭よね。全然勉強してないのに普通に合格するなんて」

目の前に座る詩乃が、円形のテーブルに頬杖をつきながら呆れたように溜め息をつく。眼鏡の奥の視線が妙に鋭く俺に突き刺さる。俺はさりげなく詩乃から目を逸らしてフライドポテトを一本取り、口のなかに放り込むと肩を竦めた。

「まあ、流石に高校に入ったらどうなるか分かんないけどな」

そう、俺が前世の記憶で勉強の内容を補完できるのはせいぜいが高校二年生の半ばくらいまで。そこからは真面目に勉強するほかないだろう。つまり、俺の無勉強チートは高校の途中で終わってしまう。

だが、そんな俺の悩みが詩乃に伝わるわけもない。詩乃は暫く俺をじっと見詰めていたかと思うと、深い深い溜め息をついた。

「あんたと一緒に勉強していると努力してて自分がバカみたいに思えて凄く脱力しちゃうから、早く真面目に勉強し始めるのを願ってるわ」

「——前向きに善処する方向で検討したいと思います」

「それ、政治家が言う『絶対にしない』ってことよね」

「ぜ、絶対にとまでは言わないよ——って、そこまで言うほどか？」

少し不満げな視線を詩乃に向けるも、詩乃は知らん顔でハンバーガーを頬張る。無視されたことにむっとしながらも、俺も自分のハンバーガーにかぶり付いた。もぐもぐとハンバーガーを咀嚼しながらふと未来のことへ思いを馳せる。

まあ、これでGGO編のメイン舞台である東京の高校へ行ける。いわゆる、これからが本番というわけだ。

俺はハンバーガーの最後の切れ端を口に放り込みながら、決意を新たにした。……と、そんなタイミングで不意に頭を過るのは。

——って、結局中学生の間に告白出来なかつたし……
自分の意気地の無さに少し泣けた。

GGO 原作前

新川との初コンタクト

入学式が無事に終わり。その直後に発表されたクラス編成では、俺と詩乃は別のクラスになっていた。代わりに……と言うか、原作では詩乃と同じクラスだった筈の新川くんと俺が何故か同じクラスになってしまった。さらに、何の嫌がらせか出席番号の関係で俺の隣の席に新川くんが座ってるんですがそれは。

まあ、何にせよ新川くんには色々と思うところがあつてコンタクトを取らなければならぬと思つていたので、いい機会と言えばいい機会なのだが……だが。

(話しかける切っかけがない……)

それに、個人的に用事があるとは言え、新川くんには話しかけにくい。

——いや、だって……考えてみてほしい。

焦点の合わない瞳で「アサダサンアサダサン」なんてリピートするような少年だよ？ 「僕の朝田さん」とか言つて詩乃に覆い被さつて匂いを嗅ぐような少年だよ？

横目でチラリと隣を確認すると、他の生徒が各々帰る用意をしている中、新川くんは何かのゲームの特集をしているらしい雑誌を夢中になって読んでいた。

……ん？ ゲーム？

もしかしたら——。なんて少しの希望を抱きながらそうつと新川くんが開いているその雑誌のページを覗き込む。すると、やはり言うべきだろうか。俺の予想通りそのページに大きく載っていたのは『Gun Gale Online』についての記事だった。真ん中にデカデカと載っている、銃を構えたバニーガールが妙に印象的だ。何となく感動して、「へえ」と思わず感嘆の声を漏らしてしまう。

「!？」

俺のその声に新川くんが過剰な反応を見せた。見られたら不味い

とでも思っているのか、慌てて雑誌を閉じようとする彼の手を抑えて、苦笑いを浮かべてみせる。

「ごめん、驚かせちゃったか。君、そのゲームやってるの？」

「……え、ええと……、うん」

俺の言葉にオドオドしながらも頷く新川くん。実際は彼がGGOをしていることなど原作知識を持っているため百も承知だったが、これでGGOと一緒にやる口実が出来た。俺は身を乗り出して、新川くんへと笑いかける。

「俺もそれやろうと思ってるんだけどさ、何分勝手が分からなくて躊躇っちゃって。もし君が良ければ俺と一緒にそのゲームやってくれないかな？」

「……う、うん。じゃあ一緒にやる？」

「おつ、ありがと。よし、じゃあ今日の学校の帰りにでも買うわ。いつやる？」

辟易しながらも頷く新川くんに、俺は勢いによって畳み掛ける。……でも、こういう勢いに吞まれやすい人って割りとカツアゲとかの対象にされやすいんだよ……。心無しか彼の未来の学校生活に不安を持ちながらも話す俺の心など露ほども知らずに、新川くんが嬉しそうに頷く。

「じゃあ、土曜日の……そうだね、開始地点に11時でいい？僕のバターはシュピーゲルで、金髪の男だから！」

「おう、土曜日の11時な？ 分かった」

俺も新川くんの言葉に頷きながら、心の中の彼に対する評価を少し改めた。

新川くん——…意外と元から変態って訳でも無いかも。

因みに、帰りは勿論詩乃と一緒に帰りました。まる。

そして、何事もなく数日が経ち——土曜日。俺は慣れた手付きでアミューズフィアを装着して、GGOにログインした。因みに、時間はまだ10時半。約束の時間には早すぎると感じるかもしれないが、アバターの作成に大体30分はかかるだろうと見越してのこのログイン

時間である。

「リンクスタート」

そう呟いた途端、俺の視界は見慣れた放射光で白く染まった。暫くして、白い空間に立つ俺に向けて音声アナウンスが始まる。

『Welcome to Gun Gale Online!』の文字に続き、音声アナウンスや出てくるウィンドウに従ってどの言語を使用するか、利用規約に同意するか等を選択する。因みに、ユーザー名はALOと同じ『Qoo』にした。そして、最後の質問である『容姿はランダム作成となります。よろしいですね?』という文字がウィンドウに出てきたので、迷わずイエス。

すると、一瞬で俺の体を白い光が包んだ。因みに、身長についての設定は、体に違和感が出来て動きに支障をきたすことがあるために現実世界と同期させている。どんな感じになるのかな、等とワクワクしながら結果が出るのを待っていると。暫くして俺を包んでいた光が消えると同時に、最後の音声アナウンスが流れた。

『それでは、Gun Gale Onlineをお楽しみください!』
今度は転移を表す青い光に包まれ、俺——『Qoo』ことクーは『Gun Gale Online』の世界へと参加した。

その世界で俺が最初に見たものは、黄昏色に染まる空だった。「ほへえ……」等と気の抜けた感嘆の声を漏らしながら、辺りをぐるっと見回す。いくつもの金属質なビルが天をつくかのごとく聳え立ち、その一つ一つをガラス張りの空中回廊が繋いでいる。色鮮やかなネオンがビルの壁を埋め尽くさんばかりにキラキラと瞬く光景は、現実的で——しかし、何処か幻想的でもある。金属で舗装された道を闊歩する人達は殆どが男性だ。屈強そうな大男達がゴツゴツとした金属装備をつけて歩く姿は意外と様になって……街の中くらい外せば良いのに、等と微妙に場違いな感想が浮かぶのは俺だけだろうか。……というか非常にむさ苦しいので外していただきたい。

そんな事を考えながら約束の金髪の青年を探してキョロキョロとしていると、シユピーゲル君らしき優男を見つけた。同時に彼も俺に

気付いたようで、手を振りながらこちらへと歩いてくる。にこやかにこちらへと来ている彼の反応からして、俺のアバターは変な外見だったりというわけでは無さそうだ。そのことに小さく安堵の息を吐き、俺はシュピーゲルへと頷いた。

取り合えず。GGO内で《シュピーゲル》、いや新川君が実際にどんな奴なのかを見極めないとな――

そんな風に考えながら。

シュピーゲルとGGG

「まず何処に行くんだ？」

「えっと。まずお金を集めるのと……後はGGGに慣れないとね。昨日のうちにモンスターが比較的弱いフィールドを見つけていたから、武器を買ったら取り敢えずそこで軽くモンスターを狩ろうか」

銃を売っているというデパートへと向かう途中。俺はシュピーゲルからGGGについて幾つかレクチャーをしてもらっていた。今後の予定は、と聞くとシュピーゲルは予めざっと考えていたようで、心配は無用だったらしい。——と言っても

「このゲームって初期装備すら無いんだな。なのにこの初期金額……」

「ま、まあね……」

ウィンドウを開いてみても、見事なまでにすっからかん。何の用意もしていない初心者はそれこそキリトのように何処かで盛大に稼ぐしかなさそうだ。初心者には余り優しくないゲームだな、と一人苦笑いを浮かべる。そんな俺の気持ちに気付いたのか、シュピーゲルがおずおずと申し出た。

「あ、あのさ。もし良かったらクレジット貸そうか？」

「んー……。悪い、ちよつと試してみたいことがあるから。それが失敗したら借りるよ」

「……うん、分かった」

試してみたいこと。——そう、それは原作でキリトがしていたのと同じ稼ぎ方だ。デパートにある弾避けゲームをやって、その賞金で稼ぐ。因みに、目的はクレジットだけでは無い。ALOで培った回避術が何処まで通用するかを一応見ておきたいのだ。まあ、避けきれなくても一定のラインまで行けば少しはクレジットも貰える設定のようだったので、取り敢えずの金を稼ぐ分には十分だろう。

デパートに到着するなり例の弾避けゲームを探し始めた俺は、数分後にはそれを見つけていた。意外にもその設備の前には何人かのプ

レイヤーが列を作つて並んでおり、その盛況ぶりが窺える。だが、やはりというべきかクリアしたプレイヤーは未だに出ていないらしい。どれくらい賞金が貯まっているのか、とガンマンの後ろについているデジタル表示を見ると……約80000クレジット。——まあ、この時期にはこんなものだろう。いや、サービス開始から一ヶ月と少ししか経っていないことを考えるとこれでも多い方か。

——さて、何処まで行けるかな。

少しの高揚感を抱きながら列に並ぶ俺に、後ろをついてきていたシュピーゲルが心配そうな視線を向ける。

「これが試したいことなら……やめといた方が良いよ？まだ誰もクリアできていないんだから」

「まあまあ。やつてみたら意外と……なんてこともあるだろう？」

シュピーゲルが「まあどうしても言うなら良いけど」と渋々引き下がる。……と、そんなことを話している間に俺の番が来たようだ。面白半分に傍観している他のプレイヤー達の無遠慮な視線を浴びながら、クレジットを払う。ガンマンが何かしらを喚き、銃を収めたホルスターに右手を添えた。俺の目の前でカウントダウンが始まる。深呼吸をして微かに荒くなっていた息を整え——カウントがゼロになり、金属バーが上がると全力で走り出した。

赤い線が俺の右肩と頭、そして左足をポイントするのを感じるのと同時に、肩を狙う線の下を潜るように体を沈め、右へ飛ぶ。銃の発射音が立て続けに三回鳴り、放たれた銃弾が赤い線をなぞるのを尻目に、再び駆ける。ガンマンが銃弾を再装填する前に進めるだけ進んでおく。

——ん？これはもしかしたら……

そしてもう一度避けた辺りで『とある事』に気付いた。それが本当に正しいのかを確かめるために、駆ける速度を一度弛める。ガンマンの1ヶ所をじつと見て、彼が引き金を引くと同時に——反動を抑えようと力むからか、引き金を引く際にガンマンの肩がピクリとほんの少しだけ動く——回避。

「……やっぴり」

口のなかで小さく呟き、先程気付いたことが真実であることを確信する。因みに、キリトのように視線を読んだわけではない。キリトは何でもないことのように言っているが、視線なんていう曖昧なものを読むのは本当に難しい。恐らく、かなり慣れていないと無理だ。俺もALOで幾度となくやろうとしたが、攻撃を避けるギリギリのところであたってしまった。

——だから、やりやすい避け方を編み出したのだ。

駆けながら、ガンマンが持つ銃口を凝視する。傾き、角度、そして引き金を引くタイミング。この3つさえ分かっていたら、弾道予測線が無くても回避は出来る。勿論、言うほど簡単なことではない。頻繁に動く銃口の細かい動きを追い、且つそこから放たれる銃弾の軌道等を計算しなければならなかったため、かなりの集中力や咄嗟の計算力が必要なのだ。

……言うなれば、これは『弾道を読む』といったところか。近距離で無ければ精度が格段に落ちるのが難点だが。

飛んでくる銃弾をさらに避けて一步を踏み出す。15mを通過したことを知らせる短いSEがなったが、極限まで集中している俺の意識には届かない。

異常なまでの装填速度で放たれる銃弾を、ギリギリで回避し続ける。ノーリロードで放たれたレーザーも回避し、諦めずに銃弾を込めようとするガンマンの肩をすれ違い様に叩いた。

『オーマイ、ガーツー！』

途端、ガンマンは崩れ落ち、喧しいファンファアレーが鳴り響いた。後ろのレンガ壁が壊れて金貨がじゃらじゃらと流れ出し、ウインドウに写る俺の所持金額が目まぐるしく増えていく。

——だが、俺にそれを気にする余裕はなかった。集中は完全に途切れ、ただ呆けた表情で崩れ落ちたレンガ壁を見つめるだけだ。

なんとか正気に戻った俺がレーンを出ると、いつの間にか数倍に膨れ上がっていた見物人達は何かを小声でまじまじと囁きあっていた。人の視線を浴びることには余り慣れていないため、何となく肩身が狭い。空虚な笑みを浮かべて会釈をしながら、誰も話し掛けてこな

いのを良いことにそこを足早に去った。

慌てて人込みの中から後をついてきたシュピーゲルが興奮したように話す。

「す、すごいね！ あれを避けるなんて！」

「確実に精神は磨り減ったけどな……」

数分後、漸く人目もバラけてきた頃。俺たちはデパートの銃売場へと戻った。そして、シュピーゲルのアドバイスを聞きながら行った長いウインドウショッピングの後に、稼いだクレジットを使って購入したのは――

小ぶりなハンバーガーをかじり、昨日話し掛けてきたクラスメイ卜、遠藤さん達が繰り広げる話題に適当な相づちをうつ。

少し肌寒い土曜日の昼。私は遠藤さん達3人に誘われ、駅の近くにあるファストフード店で少し遅い昼食をとっていた。昨日知り合ったばかりで昼食に誘われた時には少し戸惑ってしまったが、遠藤さんが放った「友達」という言葉に何となく頷いてしまっていた。

「でさあ――その時――」

「へえ――あ、そう言えば――」

目の前で繰り広げられる話題にはついていけそうにもなかったが、《あの事件》を知らない同級生との時間は意外にも心が落ち着く。不意に振られた話題に曖昧に頷いて答える。……と、

――幸人は今何してるんだろう。

不意にそんなことが頭を過った。『友達』と一緒にいるのに、他人の事が思い浮かぶなんて失礼だ。慌てて頭を振って変な思考を吹き飛ばすと、懐疑の視線を向けてくる三人に「何でもない」と首を振る。

そして、私は何かむず痒いものを誤魔化すために勢いよくハンバーガーへとかぶりついた。

クールの初戦闘

俺がデパートで買った銃は、ハンドガン《ガバメントM1911A1》一挺。選んだ理由はとても単純で、見た目が個人的に気に入ったからだ。シユピーゲル曰く、この銃は世界的に見てもかなり有名な銃らしく、色々なアニメや漫画で使われているんだとか。もしかしたら、何かのアニメで見たから印象に残っていた……なんてこともあるかもしれない。

因みに、防具の値段をかなり削減したものの、金が全然足りなかったのでこれ一挺しか買えなかった。……その上、銃を買うために防具を削減しすぎたため、俺が今着けている防具は薄手の防弾ジャケット一枚のみ。銃と予備弾倉を買ってしまうと、残った金額では対プレイヤー必須アイテムとも言える対光学銃防護フィールド発生器すら買えなかったのだ。

——お金つてやっぱり大事なんだなあ……。

なんてしみじみと考えつつ、シユピーゲルに案内されるがまま彼が予め調べておいたという『モンスターが弱いフィールド』へと向かっている。小さな丘陵を登りきった時、不意に目の前でシユピーゲルが立ち止まった。こちらへと振り向き、ニツコリと微笑む。

「着いたよ」

「……漸くか」

俺は、丘から下に広がる景色を眺めて小さく頷いた。目の前に広がる茶色い荒れ地には、だがしかしほんの微かに水場があり、その周りには浅く草が生えていた。水場にはダチヨウのような体型の鳥型モンスターが三匹ほど集まっており、喉の乾きを潤すためか一心不乱に水に顔を突っ込んでいる。

シユピーゲルは、そんな動物の姿をチラリと一瞥した後、俺の言葉に頷く。

「うん。——じゃあ……まずは、あそこで水を飲んでる鳥型モンスター三匹を狩ろうか。肉食だからこっちに攻撃してくるけど、その分経験値も多いし、動きが遅いからかなり狙いやすいと思うよ」

「ほい、了解」

群れなのだろうか、三匹ほど固まって無警戒に水を飲んでいる鳥型モンスターに後ろから静かに近付き、彼我の距離が30mくらいの所まで行くと銃の安全装置を2つとも外した。弾倉に弾丸が入っていることを確認しながら一度コッキングし、確りと両手で銃を構える。息を整えながら引き金に指を当てると、照準器を覗き込む俺の視界に収縮を繰り返す緑色の円が表示された。着弾予測円。このまま撃てば、この円の中の何処かに銃弾が当たる、というものだ。

深呼吸で鼓動を落ち着けながら、その円が最も小さくなったタイミングで引き金を引く。銃口から放たれた11.43×23mm弾は、夢中になって水を飲んでた鳥型モンスターの丸い体に見事命中した。少なめに設定されていたらしいそのHPバーを見事に削りきつた。

「ガグアッ！」

——と、近くで仲間が倒れたことに反応した残りの二匹は水を飲むのをやめ、威嚇の鳴き声を上げながらこちらへと振り向いた。俺の姿を確認し、バタバタと走りながら突っ込んでくる。

シュピーゲルの言っていた通り、動きはかなり遅かった。軽く右に避けて、すれ違い様に頭に銃撃。ここまでの至近距離だと、システムアシスト有りなら幾ら初心者でも外す方が難しい。命中したのは見事に弱点だったようで、情けない断末魔を上げながらポリゴンが爆散。勇ましく再び突っ込んできた最後の一匹もすぐに後を追うことになった。

「これで終了……つと」

息を吐いて肩から力を抜くと、後ろからパチパチと手を叩く音がした。勿論、音の主はシュピーゲルだ。

「うん、流石にVR慣れしてるだけあって動きは軽いね。……これだけ出来たら、プレイヤーと戦ってみるのも有りかも」

「流石に早くないか？」

「何事も経験だよー？」

誰かとゲームをするのがそんなに嬉しいのか、くすくすと心底楽し

そうに笑うシユピーゲルを見て、俺は小さく肩を竦めた。

——普通にゲームしてる分には良いやつなんだがなあ……前科があるから信用しきれない……。

前科も何も新川くんはこの世界ではまだ何もやっていないのだが、それに突っ込むものは誰もいなかった。

因みに、プレイヤー戦では特に問題もなく、一日中荒野をさまざつた結果——合計五人ものプレイヤーをキルすることが出来た。初期からこのゲームをやっているシユピーゲルについてきてもらっていたとは言え、取り敢えず本日のプレイ結果は上々と言えるだろう。

そして、現在。街の中の小さな酒場にて。俺とシユピーゲルは酒を飲み交わしていた。『酒』と言っても、所詮ゲーム内のアイテムなので酔うことは決してないのだが……未成年でも飲める上、雰囲気を楽しむことは出来るのだ。

「く、クーは接近戦凄く強いね……」

「……もう近接戦闘はやりたくない」

度重なる近接戦闘で完全に疲れきっていた俺は、ぐったりとテーブルに突っ伏した。何故俺がここまで疲労しているのか、と言うと。戦った5人のプレイヤーの内、4人とは意図せず近接戦闘になってしまったのだ。……その上、位置取りが悪いのか戦うのは何故か殆ど俺だけ。その結果、超至近距離の銃弾の回避を数回も連続して行わなければならなくなってしまったために俺の精神が磨り減らされ——こうなっているわけだ。

テーブルに突っ伏してぶつぶつと愚痴を漏らす俺に苦笑いを浮かべ、シユピーゲルは小さく肩を竦める。

「プレイヤースキルが高いのは良いことだよ」

「……だと、良いんだけどなあ」

俺は小さく溜め息をつき、そうボヤいた。

詩乃とGGO I

黄昏色の空の下に広がる仮想世界に降り立った私は、ここで会う約束をしていた少年の姿を探してきよろきよろと辺りを見回した。しかし、金属で舗装された道を歩いていくのは、ゴツゴツした装備を付けて歩く山のような体躯の男性だらけ。残念ながら、彼から聞いていた容姿の少年の姿は見つからない。

慣れない感覚と不安を抱きながら忙しく辺りを見回していると、不意に肩が叩かれた。

——もしかしたら不審者なのではないだろうか。

そんな考えが一瞬間に過り、思わずびくりと身を竦ませて恐る恐る後ろへと振り向く。すると、そこには。

「——あれ？ 詩乃……シノン、で合ってるよな？」

他のプレイヤー達とは似つかない、ラフな格好をしている少年が私——シノンの肩を叩いた姿勢のまま固まっていた。現実世界とは顔が違うが、聞いてあつた通りの格好だったため何となく彼が自分の探していた少年だと分かった。その間の抜けた表情がおかしく、先程までの不安などを忘れて思わず吹き出しそうになってしまう。ギリギリでその衝動を堪え、私は微笑んだ。

「ええ、合ってるわよ。幸人——じゃなくてこの世界ではクー……だったかしら？」

私の言葉に、彼——クーは、満足げに頷いた。

何故私がか、『Gun Gale Online』の中にいるのか。話は、一日前に遡る。

ゴールデンウィーク真つ只中の土曜日。私は、開いていた本のページから逃げるように目を逸らした。沸き上がってきた吐き気を何とか堪え、本を閉じる。

「大丈夫か？」

私の様子に気付いたのだろう、テーブルを挟んで前に座る幸人へと

頷き、曖昧に笑う。

「ええ、大丈夫。……ありがとね。わざわざ付いてきてくれて」

「いや、今日は特に予定なかったからな。詩乃の頼みだし、図書館くらい付き合うよ」

——そう。今私と幸人がいるのは区立の図書館。私の銃に対するトラウマ克服のため、幸人に頼んでわざわざ付いてきて貰ったのだ。……と言つても、その成果は余り芳しくはなく。何か、もっと別の方法が無いか、等と最近はあるようになった。

ちらりと先程まで開いていた本——『世界銃器名鑑』の表紙を一瞥する。今のところ、まだ『あの銃』を見るのは辛い、他の銃なら少しは耐えられるくらいにはなっていた。

だが……あくまでそれはほんの小さな一步に過ぎない。『あの銃』への恐怖を克服するためには、もっと新しい何かが必要だと既に気づいていた。白く清潔な天井を仰ぐと、無意識に溜め息が溢れた。

そんな時だった。

「……あれ？ 工藤くんじゃない？」

前の方で声がして、私の視線が前方にいる幸人の方向へと引き戻される。目をやったその先——幸人にとっては自分の後ろ——には、同年代くらいの少年が分厚い本を脇に抱えて立っていた。

「……お、おう新川」

幸人はピクリと体を硬直させると、何故か錆び付いた機械のような動きで彼へと振り返り、ぎこちなく笑みを浮かべた。途中、一瞬だけ私の方をちらりと見た気がするが、気のせいだろうか。

少年——新川君は、私と同じように幸人の様子に違和感を感じたのか、一度首を傾げた。だが、その事について言及する前に漸く私へと気付いたらしく、慌てて会釈。

「こ、こんにちは。え、えーつと……工藤くんの彼女？」

こちらでも会釈を返すと、突然彼がおおずと訊ねてきた。よく言われるが、まだ間違えられるのには慣れない。羞恥からカアツと顔に血がのぼるのを感じながら、私はそのことを否定しようと口を——

「い、いや、違う違う」

開こうとしたところで、幸人が慌てて首を振った。こちらを一瞥し、ふっと表情を緩める。その笑みは、何処か暖かくて。

「違う、けど……大切な人だ」

「っ!!」

彼の真つ直ぐな言葉に、私は弾かれるように幸人から顔を背けた。自分でも分かるほど、顔が熱い。

——何言ってるのよ!

心のなかで愚痴にもつかない言葉を漏らす。新川君はそんな私と幸人の間に視線を往復させ——やがて、何かに納得したように頷いた。

だが、その話題を更に続けるようなことはせず、私と幸人の間に流れる微妙な雰囲気をつらわらせるようにわざと声を明るくして幸人に話し掛ける。

「あ、そう言えば工藤くん。GGOの話なんだけど、M1911じゃ射程が——」

だが、新川君の言葉の途中に聞こえた単語に、ふと違和感を感じた。記憶のなかを漁ると、その違和感の正体は簡単に分かった。幸人の会話で出るはずのない単語。最近——いや、先程まで読んでいた本で見たばかりの名前。震える声で、幸人に問う。

「M1911……って、銃の名前……よね。何で……幸人が？」

詩乃とGGO II

しまった。

今日、この図書館に来てからこの言葉が頭に浮かんだのは実に三回目。

言うまでもなく一回目は、詩乃と接触をさせる予定の無かった新川が、詩乃と一緒に居た俺に話し掛けてきてしまったこと。取り敢えず新川空気読め。

二回目は新川が唐突に何の脈絡もなくGGOの話を始めしまったこと。……つまり、詩乃がGGOを始めた際に、新川……いや、シユピーゲルとの接触が不可避となってしまうことだ。うん、新川空気読め。

三回目が、現在。先程まで『世界銃器名鑑』なる本を読んでいたため、新川が放った『M1911』というハンドガンの名前に詩乃が反応してしまったこと。やはり新川貴様か。

「何で、銃の名前を幸人が……？」

俺が答えあぐねているのを見て、少し辛そうに表情を歪めながら詩乃が再び問い掛けてくる。ここまで来たら誤魔化すことは出来ないだろう。そう考え、俺は仕方なく説明を始めた。何を言うべきか思案しながら、一つ一つ話していく。

「VRMMO……ってジャンルは詩乃も知ってるよな？」

やはり、SAO事件がニュースなどで大々的に報道されていたのもあって、それくらいは知っているらしい。詩乃が無言のままコクンと頷くのを見て、続ける。

「その所謂FPS……を最近やり始めたんだよ」

チラリとだけ新川を一瞥すると、彼は突然真面目な空気になってしまった俺と詩乃の間へと視線を右往左往させていた。詩乃も新川へと一度だけ視線を向け、すぐに俺へと向き直る。

「じゃあ……幸人はこの人とそれをやっているって事なのね。……それは分かった、けど」

そこで一度言葉を区切り深く息を吸うと、先程までとは違う、揺る

ぎのない瞳で詩乃は俺を真っ直ぐに見つめた。

「幸人は、何で、それを始めたの？」

俺は、その言葉に

「何で、なんだろうなあ……」

虚空を仰ぎながら、そう答えることしかできなかった。俺の返答がふざけていると感じたのだろう、怒った様子で何か言葉を口に出そうとした詩乃を手で制し、後の言葉を続ける。

「始めた当初は詩乃のリハビリになるか、とか色々理由考えてたんだけどさ。……今思うとそれは違うかなーって」

「……どういふこと？」

その形の良い眉を寄せて、煮え切らない様子の少女へと俺は笑いかけた。『まあ』と前置きした後、彼女には——いや、俺以外の人間には伝わらないような言葉を放つ。

「強いて言うなら……詩乃と、同じ景色を見たかったんだよ」

これは、俺の本当の気持ちだ。詩乃と同じ景色を見たいし、ずっと隣に居たい。まだ、そこまで言葉に出すのは恥ずかしすぎるので出来ないけれど。この言葉は、俺の紛れもない本心だった。

とは言え、今この時点で詩乃はまだ『シノン』ではない。そのため、GGOを始めた理由が彼女には伝わるわけも無いだろうと思っていたし、実際にそうなるかと予期していたのだが……。

現実には少し違った。

彼女は俺の言葉を聞いて、目を見張ると……しかし、不意に優しく微笑んだのだ。その唇が、言葉を紡ぐ。

「言葉の意味はよく分かんないけど、何となく、分かったわ。——ねえ、幸人。……そのゲームって、いくらくらいで始められるの？」

図書館へと行って詩乃がGGOを始めることとなった次の日の午前中に、俺と詩乃はアミュスフィアとGGOを買いに行った。まあ、あくまで俺は付き添いと言うだけだが。因みに、俺と詩乃は余りお金を使うタイプではない。本が読みたかったら図書館へと行くし、二人

でやっているゲームだって殆どが使い回しだ。

そのため資金もある程度はあり、その買い物は使用可能上限額ギリギリの所で留まった。

アミクスファイアを買った後、早速ということで俺と詩乃はGGO内で待ち合わせをした。勿論、詩乃はGGOが初めてであるため、まだ比較的勝手が分かる俺が色々と教えることになったのは言うまでもない。因みに、場所は当然ながらゲームの開始位置であるグロツケン広場。

「さて、と。シノンはまだ来てないな」

待ち合わせ時刻の20分前。グロツケン広場へとやってきた俺は、取り敢えず一度広場を見回した。だが、前世の時にアニメやイラストで見たような水色の髪は見当たらなかったもので、一応彼女よりは早くログイン出来たらしい。

……と言つても、早く来たところで余りすることは無い。自分としては丁度良いタイミングで詩乃もログインする、というのが一番であつたが、まあ仕方ない。

——時間を潰すために、何とはなしにウィンドウを広げて、自分のストレージを表示する。

残りの弾薬の数などを確認しながら、そう言えば、と昨日の新川の言葉を思い出す。

「……M1911じゃ射程がどうか言つてたな。今度適当な狙撃銃でも見繕つて貰うかな……」

最近は自分でも裏路地にあるような店を見て回るようになり、色々知り合いも出来た。出来た知り合いの割合と言えば、一人の例外を除くと全てゴツイオッサン達だが……まあそれはゲームの性格上仕方あるまい。

——と、そんなことをしている間にウィンドウの右上にあるデジタル時計は待ち合わせ時刻の5分前を指していた。ウィンドウを消し、先程したように辺りをぐるっと見回す。……そして、見慣れたよう

な、しかし初めて見る特徴的な明るい水色の髪を見つけた。

こちらには背を向けており、不安そうにキョロキョロと辺りを見回す様子は何処か可愛らしく、このままずっと見ていたい衝動にかられた。だが、それを何とか抑え、ポン、と少女の肩を叩く。

彼女は心底驚いたようにびくりと身を竦ませると、恐る恐るこちらへと振り向いた。彼女の過剰な驚き方に疑問を覚え、問い掛ける。

「——あれ？ 詩乃……シノン、で合ってるよな？」

果たして。何処か獰猛な猫を思わせるアバターの外見を持つ少女は、俺の顔と服装を見て、安心したように深く息を吐いた。……何かを堪えるようにその吐息が小さく震えていたのは気のせいだったのだろうか。

「ええ、合ってるわよ。幸人——じゃなくてこの世界ではクー……だったかしら？」

先程の違和感を取り敢えず端に置き、彼女の言葉に、俺は満足げに頷いた。

シノンとGGO

「で、どうだ？　ここら辺だけでも銃をこれ見よがしに引っ提げてるプレイヤーは結構いるけど」

シノンの分の銃を買うために店へと向かっている途中に発した俺の言葉を聞いて、隣を歩くシノンはキョトンとした表情で首を傾げた。

「えつと……これ、そういうゲームなんでしょ？」

「あ……いや、その反応が出来るなら大丈夫だな」

「……どうということ？」

「要するに、銃に対する拒否反応が出てないってこと」

「……あ。言われてみれば、確かにそうね。もしかしたら、歩く人が皆現実離れしている格好だからかも」

シノンと会話を交わしながら薄暗い交差点を左に曲がると、目的の店が見えてきた。

デパートのようにNPCが売るようなスタイルではなく、プレイヤーが仕入れから売却までを行う……言わば商店のようなものだ。

ここなら意外な掘り出し物があったり、普通より安く銃が買えたりする。その上、俺がシノンを手連れてきたここは特に銃の値段が低めに設定されている場所だ。……と言っても、流石にデパートと比べると品物の絶対数に天と地ほどの差があるため、初心者を手連れてくるのは余り向かない。

まあ、今回のように買う銃に大体の検討をつけている場合は、こういう場所に來ることが多い。

勿論、シノンに買う銃と言えば狙撃銃……なのだが。

「……うん、高いな」

元々の値段が相当安いロシア製の狙撃銃を、顔見知りである店員から最大の譲歩を引き出してさえも数万クレジットは下らなかつた。この額はどう足掻いても初心者に出せる金額ではない。

だが、シノンに狙撃銃を持たせないのは個人的に何か嫌だ。

仕方あるまい。こうなったら――

「お買い上げありがとうございますー」

シノンの所持金では銃を買うことはできない。それならば答えはどうするべきか。答えは簡単。

——俺が買えば良いじゃない！

俺は、そんな某マリー何とかネットさんの思考回路に行き着くと、自分のクレジットを使って比較的安めの狙撃銃を買った。自分の銃もまともに揃えていないのに他人に買うと言うのは周りから見れば滑稽以外の何物でもないのだろうが、そこら辺は気にしない。

因みに、買った銃は皆さんお馴染みの『ドラグノフ狙撃銃』。ロシア製の銃の中で最も有名な銃の1つだ。原作でシノンがヘカートのドロップまで使っていた狙撃銃はフランス製の『FR-F2』だったらしいのだが、これは一応GGO内でもレアな方の狙撃銃なので、残念ながら売っていなかった。……まあ、売っていたとしても俺の所持金では買うことはできなかっただろうが。

俺に銃を買わせた形になって、少し罪悪感を感じているのか、少しすまなそうな表情になっているシノンにドラグノフを渡すと、俺は肩を竦めて笑った。

「大丈夫大丈夫。これくらいすぐ貯まるって」

実際はそんなことは無い。大体、学校の無い日に6時間程潜って入手したお金から弾薬等の消耗品の分を引くと儲けは大体2万クレジットちよい。現実のお金に換算すると200円を越えるくらいが関の山。純粹にお金を稼ごうとするのなら、リアルで普通にバイトした方が数十倍稼げるだろう。かと言って、もっと——例えば1日10時間以上この世界に潜ると言うのも心理的に抵抗がある。体が鈍ってしまいうし、何というか……長時間VR世界にいると、酔ってしまうのだ。

まあ、そんなわけでこの出費は俺にとって相当痛いものだったのだが、そんなことは一切表情に出さず、何の問題もないようにへらりと笑う。

「防具を買ってやれる金は流石に無いけど……弾薬くらいは買うよ」

「……ありがとう」

「任せろって」

ウインドウを開いて自分の所持金を確認した俺は、ドラグノフを抱えながらこちらを見詰めてくるシノンへと少し自慢気に頷いて見せた。

買った銃の射撃練習が出来るといふ射撃場で、弾の装填方法やこのゲーム特有のシステムである弾道予測線、そして着弾予測円のこと等をざっと説明したクーが次に私を連れて向かったのは、何処となく寂しさを感ぜさせるような雰囲気寂れた荒野。

手に持った双眼鏡で辺りを見回すと、そんな荒野をウロウロとさま迷っているのは人型の機械だった。動く度にカタカタと乾いた金属音が聞こえてきそうなほどに表面は錆び付いており、その姿はかなりの年季を窺わせる。

人間でいう顔の辺りには赤いランプが1つだけ点滅しており、そこにセンサーがあるのだということは何となく想像がついた。

「……あれを撃ってってこと？双眼鏡の表記を見た感じじゃ、まだ450mほど距離があるんだけど」

「ぶ明察。でもこれ以上近付くと向こうの索敵範囲に入るからなあ。……まあ、外しても向かってきた時は俺が始末するから安心して撃ってみてくれ」

先程レクチャーを受けたときの話では、私がクーに買って貰ったこの『ドラグノフ狙撃銃』の有効射程は600mを越えるとのことだった。

確かに、撃って狙えない距離ではないのだろう。

私はクーの言葉に頷くと、地面に伏せて銃を構えた。

最も姿勢が安定する、いわゆる伏射姿勢。備え付けのスコープを覗いて、ぎこちなく歩くその機械を照準線を中心に捉える。

そして、引き金に人指し指を当てると、収縮する円が私の視界に表
示された。

人型の機械がその円を占める割合は円が最大の時には2割、最小の
時には5割と言ったところだろうか。出来れば恐らく急所であるだ
ろう頭を狙いたいが――

私は気持ちを落ち着かせるために深く息を吐くと、スコープを覗く
瞳に意識を集中し――緊張で鼓動が早くなってしまいう前、収縮する円
が最も小さくなったと同時に引き金を引いた。

シノンの実力

「……ホントに想像以上だよ」

伏射姿勢のまま、驚くべき集中力でドラグノフのスコープを覗き続けるシノンを見つめ、俺は脱力したように息を吐いた。

シノンがゆっくりと引き金を引き絞るのと同時、ドラグノフから放たれた7・62mm弾が500m先をカタカタときこちなく歩いてきた機械人形のセンサー部を撃ち抜く。機械人形は倒れ、ポリゴンの破片を撒き散らして爆散。

そこまです撃った姿勢のまま微動だにせずにドラグノフのスコープで無感情に眺めていたシノンは、ここでようやくレンズから目を離して体を起こすと、俺に視線を向けた。

「さっき、何か言った？」

「いや、何も。……ってか、これで何体目だ？ 10機越えた辺りからカウントやめてんだけど俺」

別に本人に言うような事でもない。適当に誤魔化して俺が腰に手を当てながら言うと、シノンはウインドウを開き、ストレージ内のマガジン数を数えながら

「えーつと……そうね。今のがマガジン4つ目に変えて5回目の射撃だから……」

「撃つたのは35発くらいか。……外れたのは12発ぐらいだけだから……」

「大体23体？」

「……シノンってホントに初心者なんだよな？」

スナイパーに必須な『着弾予測円の収縮を抑える』等のスキルを取っていないのに、3分の2程もの弾を当てるシノンの狙撃能力に戦慄する。

まだ500mという中距離だとはいえ、原作で2000m近い狙撃を苦もなく成功させていた実力は紛れもないということだろう。

「意外と当たるものなのね」

そんなことを手元のドラグノフに向けて呟くシノンに、俺は乾いた

笑いを浮かべる他なかった。と言うのも、俺の遠距離射撃能力はそこまで高くない。この前銃マニアの重課金兵である知り合いの女性に借りて撃たせてもらった割りとは命中率が高いアサルトライフルでさえ、スキルを使って大体400mまでしか必中させることはできなかったのだ。遠距離射撃があまり得意でないとは言え、もう少し精度は上げておきたい。

……頑張つて育成しなきゃシノンに置いてかれるかもなあ……。

なんてことを考え、俺は深く溜め息をつき混じりに首を振る。

「いや、シノンの狙撃適正が高すぎるだけなんだよ。普通スキル無しでこんな命中はさせれねーもん」

「そうなの？」

「そうなの」

こりんと首を傾げるシノンに大きく頷いてみせる。命中率が高いのが普通だと思つてもらつては俺が困る。例えば俺の場合だと、30m以内での戦闘中、弾丸の命中率は6割。これでも相当高い方なのだ。

まあ、狙撃と近接戦闘と言うだけでかなり差は出るものなのだが。

「残りの弾倉は何本くらいだ？」

「この次でラストね」

「んー……じゃあそろそろ終わりにするか。まだ初日だしな」

「了解」

シノンは頷き、ドラグノフを肩に掛けた。俺も、結局出番の無かったガバメントを腿の辺りに付けてあるホルスターに仕舞うと、グロツケンへと戻る道のりをゆっくりと歩き始めた。

そして、その帰り道の途中。俺とシノンは、何となくとりとめの無い話を交わしながら歩いていった。

P K推奨のGGOの中なのに気を抜きすぎだと思われるかもしれないが、俺たちが行っていた人形狩りは本当に初心者用のチュートリアルみたいなものだ。大したドロップ品や金が無い以上、ここからの帰り道にP K専門のスコードロンと出会うことなどそうそうない。

一応双眼鏡で時々辺りを見回しはするが、狙撃等で殺されて『死に戻り』しても、別に気にならないレベルの出費にしかならない。

だから、意識がどうしても会話に割かれてしまうのは仕方の無いことだと言えた。

砂塵がもうもうと立ち上がる橙色の荒野を歩きながら、双眼鏡片手に交わすのは何てことのないリアルの話。

VR世界でリアルの話をするのはタブーだが、色々話したいこともある。周りに人影も無いし、まさか今この時期に原作で死銃が使っていたような光学迷彩を使えるヤツもいないはずだから、多分大丈夫だろう。

「……でも、クー、いつの間にか友達出来たのね」

「あ、うん？ 俺が友達作ってちやおかしいか？」

「ううん。でも、中学のときは私のせいで友達居なかったでしょ？」

隣を歩くシノンの声に少し寂しさが籠ったのが分かって、俺は軽く肩を竦める。

「シノンのせいじゃないって。俺はわざと友達作らなかったんだし」

「どういうこと？」

シノンがこちらを見つめて小首を傾げる。俺は軽く自嘲的な笑みを浮かべた。過去を思い出すように虚空を仰ぎながら

「ぶっちゃけ、話が合う奴が居なかったんだよ。詩乃と一緒に居ればそれだけで良かったしな」

世代が違うからなのか、中学校のときの同級生とは全然話が合わなかったのは事実だ。転生者なのだから仕方がないのかもしれないが「そんなのもあったなあ」と懐かしむ箇所にも他人と大きくズレがあり、色々疲れた覚えがある。

だから、他の同級生とは何となく一線を引いていたところがあったが……別にそれは詩乃のせいではない。

「……ふ、ふーん。そう」

「……ん？ どうかしたか？」

まさかそれが伝わったわけでもないだろうが、突然シノンは俺から

顔を背け、ぶっきらぼうに答えた。何故か水色の髪からのぞく耳が真つ赤になっている。

真意を測りかねて俺が首を傾げると、シノンは何かを誤魔化すように首をブンブンと勢いよく横に振る。

そして、話を逸らすように俺へと視線を向けなまま、呟く。

「……あ、そう言えば。私にも友達出来たのよ」

「へえ、どんな奴？」

原作では詩乃に新川以外の友達が居た覚えは無いのだが……原作改変が起こってしまったりしたのだろうか。まあ、何にせよ俺にはそうそう関係のあることではないだろう。そう高をくくって何てことのないことのように俺が聞くと、シノンは心無し胸を張って小さく微笑む。

「えつと……遠藤さんとか」

……あれ？ 何か聞き覚えのある嫌な名前が。

遠藤への対策 I

もしかしてと考え、シノンから詳しく話を聞いている内に俺の中の疑いは確信へと変わっていった。

そう、……遠藤さんというのは原作にいた詩乃に嫌がらせをしていた嫌な感じの女子だ、という確信へと。

新川ばかりを警戒して、完全に遠藤達のことを忘れていたことについて実に間抜けな自分を攻めたくなるが、今はそれよりも彼女をどうするかを考えるべきだ、と頭を振って思考を切り替える。

この時に、俺の頭に浮かんだ選択肢としては三つ。

一つ目は、遠藤さんとの云々も原作では詩乃の成長に繋がった所が無いので無いので、彼女を放置する。

二つ目は、遠藤さんの詩乃との接触を完全に絶ちにかかると。

三つ目は、既に渡してしまっていると言う合鍵を何とか詩乃に返してもらい、良心的で友好的な関係を詩乃と遠藤さんの間でつくってもらう、というもののだが……。

一つ目は言語道断。あの郵便局を止められなかった時に、もう詩乃に『辛い思いはさせない』と誓ったのだ。こんなことで詩乃をみすみす傷つけるわけにはいかない。

二つ目は……まあこれが一番妥当だろう。デメリットは詩乃の『話すことが出来る相手』が大幅に減ってしまうことくらいか。

三つ目——これが出来たら苦労はない。だが、原作の性格と今の時期を考えると時間が足りなさすぎる。

現在はGWの真っ最中。5月の初め辺りだ。詩乃と遠藤さんの間にいざこざが起きるのは5月末の土曜日という話だったはずだから……俺が別クラスなのを考えると……うん、無理だな。

よって二つ目の『遠藤さんと詩乃の関係を絶つ』方法になるわけだが、問題は方法で——

「……でも、どうしたの？ 私が遠藤さん達の話を始めた途端に様子が変わったけど」

不意に耳に届いた言葉で、俺の意識が思考から隣を歩くシノンへと

引き戻される。俺は反射的に何でもないと首を振——りそうになつてから、思い直すように口をつぐみ、数秒の思案の後に言葉を変える。「……ええつと。これ以上ここで真面目なリアルの話をする訳にも行かないからさ。これから、時間あるか？」

「え？　まあ、今日はどれだけこれに時間掛けるか分からなかったから時間に余裕はある……けど。本当にどうしたの？　ゆき——クー」戸惑いを隠せない様子のシノンに、俺はその華奢な肩を叩くと「ま、色々とな」と軽く笑って見せた。

一瞬の浮遊感覚が訪れ、すぐにそれはなくなつた。感じる仮想世界との微妙な重力の差に違和感を感じ、顔を軽く顰めながら私は体を起こす。

そして、溜まったものを吐き出すように深く息を吐いた。つい少し前まで銃を握っていた感覚を確かめるかのように両手を開いたり閉じたりして「何か変な感じ」と呟くと、ベッドに座つたまま何とはなしに室内を見回す。

「確か……すぐに来るから待つてろつて言つてたわね」

ドアのチェーンは閉めてないし、幸人は私の家の合鍵を何故か祖父から渡されていたようだから、わざわざドアを開けに行く必要も無いだろう。……何故祖父が幸人に私の家の鍵を渡しているのかは少しばかり引掛かったが、あの頑固な祖父のことだ。どうせ聞いても教えてはくれまい。

長時間同じ体勢でいたので、凝り固まつてしまった体を少しでも解すために、うんと伸びをしようとして私は不意に素肌を撫でた風の感覚に体を震わせた。

何事かと思い、自分の格好に視線を落とすと、その理由は簡単に分かった。アミユスフィアを買った際、幸人に『フルダイブする時はなるべく楽な格好をした方が良好』と言うアドバイスを受けたため、一番楽だと思われる下着姿でGGOを始めたのだった。

そんなことを軽く思い出しながら、私はベッドから立ち上がる。取

り敢えず着替える前に、長時間のフルダイブで喉が渴いたため冷蔵庫にある水でも飲もうかとの考えだったのだが——疲労からか頭が回っていないかったのだろうか。私は、肝心なことを見落としていた。幸人が「早く来る」ということ、その意味を。

冷蔵庫を開けてペットボトルの水を取り出し、私が渴いた喉を潤している、不意にガチャリと言う金属音がドアの方向から鳴った。

どうやら幸人が来たらしい。軽く視線をそちらに向けると、ドアが開き、幸人が入ってきた——のだが、彼は何故か玄関で固まってしま

う。
私は軽く首を傾げた。自分で言うのも何だが、幸人とは相当長い間柄だ。まさか部屋に入るのに遠慮をしているというわけでもないだろうに。

「早く上がりなさいよ。大事な話があるんでしょ？」

私の言葉に、ハツとした幸人は顔を端から見ても分かるほどに顔を紅く染め、私から視線を逸らし、呟いた。

「詩乃……さん？ あのこと……服は……？」

ふ……く……？

私は幸人の言う意味が分からず、再び首を傾げそうになって——漸く、今の自分の状態を思い出す。

今の私は——完全に下着姿なのだった。

「……あ」

手に持っていたペットボトルが、音を立てて床に落ちる。私は、顔にカツと血が上るのを感じた。

遠藤への対策 Ⅱ

「……………で？　遠藤さんがどうかしたの？」

詩乃はベッドに腰かけたまま、不機嫌そうに俺を睨みながらそう言う。勿論今はしつかりと服を着ており、不可抗力とは言え下着姿を見てしまった俺はフローリングの床に正座している状態だ。容赦無く全力で引つ叩かれた頬がヒリヒリと痛む。

「あー、うん。……………実はさ」

俺は背筋を確りと伸ばしたまま、出そうとした言葉を途中で止めてしまった。というのも、単純な話——どうやって説明をして良いのか分からなかったからである。

転生というものを伏せて話す以上、どう上手く誤魔化そうとしても説明に不自然が残る。まあ、自分が転生者だ、等と言ってもどこかで頭を打ったとしか思われはしないだろうが。

かといって例えば、『遠藤さん達についての嫌な噂を聞いたから関わるのをやめてほしい』等では、所詮噂だからと軽く流されてしまう。

俺の煮え切らない様子に、詩乃は少し怪訝そうに眉を潜めた。

「……………実は？」

「あー……………うん。……………えーっと」

何とか上手く伝えられないものかと思考を巡らせるものの、具体的な解決案が出てこない。俯いたまま、どうするべきかと唸る。

詩乃は呆れたように深く長い溜め息を吐き、不意にふっと表情を緩めた。

「……………さっきのGGOでの様子からして、何も無いなんて事はないんでしょ？」

「ああ……………うん。まあ、そうなんだけどさ……………」

そう呟くと、ガリガリと頭を搔く。

仕方ない。斯くなる上は——

「遠藤さん達と関わるのをやめてくれないか？」

直球で言うしかあるまい。

この言葉に、意外にも詩乃は一切取り乱すようなことはなかった。

もしかしたら、俺が何を言うのかについては詩乃にも大体察しが付いていたのかもしれない。

ただ、真意を推し量るかのように身を乗り出してこちらを見つめる。

「——理由を聞いても良い？」

詩乃の言葉に、俺は顔を俯かせることしか出来なかった。

「ごめん。説明は——出来ない。……でも、このまま遠藤さんと居続けると詩乃は絶対後悔する。それだけは避けたいんだよ」

絞り出すように呟き、唇を血が出るほどに強く噛み締める。

——あの時みたいになんかただ見てるだけなんて事は出来ない。

口には出さないものの、基本的に今の俺の頭の中を占めているのはそれだった。避けることが出来た筈なのに、〃自分の原作知識が使えなくなるかも〃等という自己保身も甚だしい理由で詩乃を止めなかった俺の——詩乃へのせめてもの償い。

これ自体が下らない自己満足なのかもしれない。だが、それでも俺は止めたかった。

それが伝わったわけでも無かろうが、詩乃は軽く肩を竦め、溜め息をついた。何かを決心したように開いた目で俺を暫く見つめ、小さく、だが確かにコクンと頷く。

「ん、分かったわ」

「……え？」

まさかあんな言葉で納得してもらえとは思っていなかった俺は、キョトンと目を丸くする。

そんな俺を見て、詩乃はクスツと微笑んだ。

「……どうしたの？ そう頼んできたのは幸人の方じゃない」

「え？ いや、でも……あんな説明で？」

「……まあ、説明としては全然満足出来るものじゃないけど——本気だって言うのは伝わったから」

——それじゃ、ダメ？

そう言って、詩乃はいたずらっぽく笑った。

遠藤への対策 Ⅲ

「——で、関わらなくするとして、具体的にはどうやって？ まさか突然無視するわけにもいかないでしょ」

詩乃の当然とも言える質問に、その答えを予め用意していた俺は任せろと言わんばかりに胸を叩いた。

「悪いが、詩乃のお爺さんの名前を借りる。まあ、例えば『お爺さんが合鍵を貸したことに激怒していて、下手をしたら遠藤さん達のところに文句を言いに行きかねない』とか何とか言っちゃ」

因みに、こういう断り方は学生などの保護者がいる間では圧倒的な強制力を持つ。表面上では良い子な彼女達なら尚更だ。学生の時に、親が出てくることほど面倒な事はそうそう無いのだから。

俺の言いたいことは大体伝わったようので、詩乃はなるほど、と呟いた。

「確かにそれならかなり平和的に合鍵は返してもらえそうね。……でも、それはあくまで合鍵を返してもらう方法であって、関わらないようにする方法じゃ無いと思うんだけど」

詩乃の言うことも、普通に考えればそうなのだろう。しかし、俺にはある種の確信があった。

その確信の根拠は、原作知識である。原作では遠藤さん達が詩乃に話し掛けた理由は『詩乃が一人暮らしをしていて、その恩恵に預かろうとしたため』。つまり、合鍵を返してそこに自由を得られなくなった場合、彼女達の方から自然に離れていく……はずだ。

「多分、大丈夫」

「——根拠は？」

ゆつくりと首を振った俺に、詩乃は真剣な眼差しを向ける。俺は数秒思索した末、軽く目を伏せる。

「……悪い。詩乃を傷付けるようなことを言うかもしれないけど——」

「合鍵を持ってなくなった時点で、私には用済み。だから遠藤さん達は勝手に離れていく……って所辺りかしら？」

だが、詩乃が俺の言葉を遮るように続けて、俺は思わず息を呑んだ。そんな様子を見て、詩乃は「凶星ね」と肩を竦める。

「私も最近、何となくは気付き始めてたから。彼女達がわざわざ地味な私なんか話して話して掛けてきた理由。でも、幸人の話を聞いている内に確信が持てたの」

そう言っ、彼女は寂しそうに微笑んだ。……友達だと思っていた人たちに裏切られていたと言ってもおかしくはない状態だ。詩乃の心中は推して知るべしと言っものだろう。だが、彼女は一切文句などを吐かずに淡々と現実を直視している。ある意味心が強いと言っのかもしれないが、脆くもあるそれを強いと言っていいものか——

一抹の不安が生まれたが、今している話はそこについてではない。俺はその不安を振り払うように頭を軽く振ると、詩乃と『遠藤さんとの関わり合いを無くす会議』を再開したのだった。

「——そういうわけだから、ごめんなさい。合鍵、返してもらえない？」
「……分かった」

学校の授業が終わり、放課後。私が頭を下げると、意外にもあっさり遠藤さんは合鍵を返してくれた。……やはり親に行かれるのは出来るだけ避けたかったらしい。

内心でホッと安堵の息を吐き、しかしそれを外面には一切出さずに申し訳なさそうにし続けた。

すると遠藤さんは、自分の鞆を肩に掛け、

「話はそれだけ？」

「う、うん」

「じゃああたしは帰るわ。今度荷物も取りに行くから」

そう言っ、私からふいと視線を逸らした。まるで、完全に私に対する興味を失ったかのよう。

それを見た私は、心の芯が冷えきるような感覚を覚えた。

ああ、こんなものなのか、と。

友達だ何だと散々言っおきながら、そんなものなのか、と。

私に目もくれずに去っていく彼女の姿を、私は冷めた瞳で見つめ続ける。

「どうやら、私は友達と言うものを誤解していたようだ。何かひとつの目的のために表面上で馴れ合い、その目的が無くなったら関係を無くす。所詮友達など、その程度のものだっただらしい。」

「だったら……そんなものはもういらぬ」

私は誰に言うでもなく小さく呟き、帰るために鞆を肩に掛けた。

シノンとスコードロン戦

あれから、遠藤さん達は荷物を取りに来た。

そしてそのまま、一言も交わすことなく、彼女達との縁は切れた。

2ヶ月余り経った今でもふと考えてしまう。

何故私はあんな人たちと一緒に居たのだろうか——と。

「…………ふう」

頭を過った雑念を溜め息と共に絞りだし、私は伏射姿勢のままスコープを覗いた。

私がするべきことは狙撃を成功させることだ。今はそれ以外の事を考えている余裕はない——

数日前に敵モンスターからドロップした、新しい相棒であるフランス製の狙撃銃『FR F2』の感触を確かめるように軽く手で撫でながら、引き金に指を当てる。出てきた着弾予測円を750m先の標的の心臓に合わせ、それが最小にまで縮むタイミングを狙い——引く。

当たった。その確信があった。

標的のアバターが爆散したのを確認する前に、私は即座に2度目の狙撃をしようと弾を込める。ボルトアクションの銃は、前に使っていたセミオートドラグノフと比べるとどうしても連射性に劣るのが難点だ。

弾を込め終わると同時に再びスコープを覗き込み、照準を合わせた途端、間髪置かずに2発目を放つ。

今度は外した……いや、避けられた。流石に相手もベテランだ。弾を込めるといふ馴れない動作に時間を掛けすぎたか。

即座に失敗の理由を省みつつも小さく舌打ちを漏らし、私は通信用のインカムに向かって呟く。

「第一目標、成功。第二目標、失敗」

『了解。シュピーゲル、行くぞ』

『ラジャー』

微妙なノイズが混じった青年二人の応答の後、私は耳のインカムから微かに聞こえてくる銃声から、近接での銃撃戦が始まったのを知った。

私がGGOを始めてから、5回目のスコードロン戦。

私とクー、そしてシユピーゲルの3人で結成された《SSQSS》は、GGOを代表すると言っても過言ではない1つのスコードロン《メメント・モリ》に対し、奇襲を仕掛けていた。

私たちの作戦は実に簡単だ。指揮系統を混乱させるために、まず私がリーダー格らしきアバターを狙撃し、余裕があれば2人目も狙う。2発目を撃った後は成功失敗の如何に関わらず、60秒間は予め決めておいた場所に隠れ、次の狙撃の機会を窺う。その間にクーとシユピーゲルで近接戦闘を始めると言ったところである。

今回も全く同じ作戦で、今のところ上手く事が運んでいる。……と言っても、ここからが一番難関で――

『ちよ、まずいまずい！ マシンガンは流石に避けられないって！』
情けないクーの悲鳴がすぐにインカムから届いてきた。シユピーゲルも軽く自嘲気味に笑いながら

『4対2は流石に辛いね！』

そんな泣き言を漏らす。

そう、一人を狙撃で減らしたとしても、基本的に相手の方が人数が多く、私が援護できる60秒間が過ぎるまでは二人に掛かる負担が異常に大きくなるのだ。

二人のHPが、私の視界の中でジリジリと削られていくのが見えた。

クーとスコードロン戦

視界を埋め尽くさんばかりの弾道予測線を、俺は慌てて地面に伏せることで回避した。遮蔽物に隠れようと匍匐後退する俺の頭の上から、物凄い数の銃弾が風を切る音が聞こえ、思わず軽く身震いする。「うっひゃー、こんなの近付けねえだろ」

弾薬など気にしないと云わんばかりの掃射でこちらを牽制してくる相手のマシンガン使いに対して小声で文句を漏らした。かといってやられっ放しというのもシヤクだ。伏せながら『AK-47』を構え、フルオートのまま敵陣方向に弾薬をばらまく。

狙うのはマシンガンに援護されてこちらへと近付こうとしていた3人。向こうも俺の銃から出ている弾道予測線に気付いたようで、俊敏な動きで遮蔽物の陰に隠れた。

『AK-47』をセミオートに切り替え、残り少ない弾倉を即座に入れ換えると、俺はシュピーゲルと共に相手へと牽制を兼ねた銃撃をしながらインカムに向かって助けを求めろ。

「シノン、60秒まで後どれくらいだ？　そろそろマシンガンが辛いんだが」

『もう行ける』

インカムから応答が返ってくるのと同じ、火薬の炸裂音が鳴り、マシンガンの銃撃が止まった。どうやらシノンがマシンガン使いに3発目の狙撃を成功させたらしい。

これで、現状は3対2。

「これなら何とか……？」

視界の左上にある仲間のHPバーを見ると、シュピーゲルは残り3割、俺は4割程度だった。

シュピーゲルを見ると、彼は俺の言いたいことが分かったのだから、コクンと頷く。彼は遮蔽物からゆっくりと遠ざかると、その場を離れた。

後はいつも通りに――

「行くか」

俺は小さく呟くと、ウインドウを操作して『AK—47』の代わりにガバメントを装備した。そして遮蔽物の陰からすつくと立ち上がり、走り出す。圧倒的な連射力を誇るマシンガンさえ居なければ、それなりには何とか回避可能だろう、と見越しての行動である。

当然のように俺の体を幾本ものバレットラインが捉えるが、大きく身を屈めて心臓を重点的に狙っているその全てを避ける。頭の上を銃弾が通り過ぎるのを感じ、背筋に薄ら寒いものが走るが、それを無理矢理抑え付けながら、銃口の位置と数を確認するために素早く目を走らせる。勿論、走るスピードは緩めない。

取り敢えず相手の視線と銃口をこちらへと惹き付けることは出来たらしい。

次のバレットラインは避け難いようにだろう、狙っているところはバラバラに分かれていた。

「っー」

全部を避けることは諦め、それでも一番薄いところへと跳ぶ。1発の銃弾が俺の脇腹を貫通した。鈍い痺れを感じながら軽く自分のHPバーに目をやると、残り3割を切ったところだった。

相手のところまで、後50m。

右手にガバメントを握り、横一列に並んでこちらを狙う銃口の一番右の方を狙う。

再び俺の体をバレットラインが照準した。バレット・ラインの数と向きからして、3方向からのフルオート射撃。これは流石に避けきれない。

「まだか？」

回避を諦めた俺は小さく呟き、そして――

『時間稼ぎありがとう』

俺の体を数十の銃弾が貫き、HPがゼロになるとほぼ同時、シンとシュピーゲルの声を聞いた。

戦場に、一陣の風が吹く。

クーのアバターが四散した後。相手を側面から奇襲し、鍛え上げたAGIを駆使して縦横無尽に駆けるシュピーゲルを狙撃で援護し続けていると、気が付けば相手のスコードロン《メメント・モリ》は壊滅していた。

近接戦闘の途中、隙を見てクーがお得意の回避術で目立ちながら時間を稼ぎ、その間にAGIが高いシュピーゲルが相手の側面に回り込んで奇襲を掛ける。

ここまでが大体、私たちのスコードロンの作戦だ。

勿論、クーに掛かる負担が尋常ではないため、彼は十中八九戦闘中に死ぬ。具体的な数値を出してみると、今回含めて五回行ったスコードロン戦の内、実にクーは四回死んでいる。死んだときの武器ドロップはあれど、ステータス的なデスペナルティが無いGGOだから良かったものの、他のゲームであればこんな穴の多い作戦は採用しなかっただろう。

それに、一度『GGO最強』と謳われているスコードロンに駄目元で奇襲を掛けたときは、シュピーゲルが回り込む前にクーが死んでしまい、二人が戦闘不能になることもあった。

あれは危なかったなあ、とそう遠くない過去を懐かしんでいると、不意に耳に付けたインカムから、嬉しそうなシュピーゲルの叫び声が聞こえてきた。

『あー！GG6がドロップしてるよ！お金も結構落ちてる！』

『……戦利品が多くて喜ぶのは別にいいけど、早く戻らないと』

咎めるように言うと、シュピーゲルは少し落ち込んだように肩を落とし、コクンと頷いたようだった。

「酒場でクーが待ってるから」

『……』

続けた私の言葉に、彼からは何も返ってこなかった。

「シュピーゲル？」

思わず首をかしげた私に、慌てたような声でシュピーゲルは小さく呟いた。

『……う、うん、そうだね』

——今の間は何だったんだろう。

少し気にはなったが、ボーッととしていた、とかその辺りだろう。私
はそれ以上考えることをやめ、大きく伸びをした。

第2回B○B 詩乃の不安

予選がつい三日後に迫ってきた第二回B○B。このイベントは原作知識を持つ俺にとって、単なるゲームの大会という目的以上の意味を持っていた。

というのも第二回B○Bが、新川が死銃の一人になってしまうことに深く関わる大きな出来事だということを俺が知っているからである。

原作での流れはこうだ。第二回B○Bでシノンは無事本大会まで勝ち残り22位になるのだが、新川——シユピーゲルは予選準決勝で敗退。そして本大会で、実質GGOTツプのAGI型である闇風を破って優勝したゼクシードが《AGI万能論》を否定。それにより《AGI万能論》を信用してAGIにステータスを全振りしていた新川が彼を憎み、死銃事件が始まる。簡単に纏めるとこんな感じだ。

要するに、この大会の結果によって死銃事件の発生如何が大きく変わるのである。

だから。

例えば、俺が本大会または予選でゼクシードと当たり、そこで彼を倒すことが出来さえすれば——

死銃事件を未然に防ぐことさえ不可能ではない、筈だと思う。

「出来る、とは思っただけどなあ」

夜の11時。まだ俺の部屋の灯りは消えていなかった。第二回B○Bの予選が近付いている今、日が経つに連れて俺の緊張は増しに増している。明日ある学校の事など、眼中には無い。

当然だ。俺の大会の成績で、新川と詩乃の運命が大きく変わるのかもしれないのだから。

今まで数カ月友人として接してきた俺には分かる。新川は別に根っからの悪いやつじゃない。一応とはいえ、他人のことを思いやる

ことが出来ている。だから、原作の詩乃が一度新川に惹かれたのも納得は……行かないが、まあ分からなくもない。

確かに、少し歪んでいる所はあるのかもしれないが、それでも、死銃事件のために彼の人生が無茶苦茶になるというのは、新川のゲーム友達として看過できる物ではない。

——何にせよ、俺の頑張り次第か。

ドアの鍵が閉まっているのを確認し、部屋の電気を消す。だが、俺は眠ろうとはせず、慣れた動作でアミクスファイアを頭に装着し、ベッドに寝転がる。今はこちらが最優先だ。睡眠時間なんて——学校で幾らでも取れる。

そして俺は

「リンク・スタート」

B o B 前の訓練の仕上げに、銃弾飛び交う荒野の世界へとログインした。

最近、随分幸人に元気が無い。否、何かを思い詰めている、といった方が正しいかもしれない。

私と話しているときでも、ここじゃない何処かに意識が行っているようで、完全に上の空だ。それに、全然寝ることが出来ないようだ。寝不足でふらつく彼を見ていると、とても不安になる。

何か、無茶をしているんじゃないか。

けれどもその不安を口に出すことはしなかった。

私が聞いたら、幸人は一応答えてくれるだろう。何時ものように肝心な所をボカした、空虚な話を。

私が望んでいるのはそんな答えじゃないと気付いていても、それを話す。まるで私が信用されていないようで、辛くなる。

だから、今は聞かない。また、幸人が話してくれるときがくれば、聞けばいい。それだけのことなのだから。

でも、それが分かっている。

「少しくらいは頼ってくれても良いじゃない……」
漏れ出るその言葉を抑えることは、私には出来なかった。
不安が拭われることの無いまま、時は流れていく。

三日はとても早く過ぎていった。

「能力値も十分。装備も上々……つと」

第二回BOB予選当日。死銃対策にウインドウを不可視状態にしてエントリーを終えた俺は、選手用の控え室で最後の点検を行っていた。

出来ることは全てやったつもりだ。武器の整備はバッチリだし、予選で当たる相手の情報も入手出来るだけ入手しておいた。残念ながら予選でゼクシードと当たることは叶わなかったが、それは運が悪かったとしか言い様がない。代わりと言うのもおかしいが、予選でシュピーゲルやシノンと当たることはなかった。そこは有り難く感じている。シュピーゲルを準決勝で破るのが俺だった、なんていう最低な結果は望んでいない。

ここままでして、それでも予選落ちしたりするのであれば、単純に俺の技術が低かったというだけ。そこは諦めて起こるであろう死銃事件の『解決』方法へと思考を進めることにするとしよう。

……まあ、でも。

「負けるつもりなんてサラサラ無いけどな」

俺は呟き、ストレージから出した愛銃を静かに握りしめた。

第二回BOB、予選――

開始。

詩乃へのアドバイス

予選が終わった。結果だけ言おう。

俺は予選決勝でマシンガン持ち相手に敗北したものの、何とか本戦出場。一応ノルマは達成した形になった。

シノンも原作通り本戦出場が決定したが、俺と同じく予選決勝では敗北。シユピーゲルは残念ながらもやはり原作通り予選準決勝で敗退。原作とは違って俺が居ることですユピーゲルにも微妙に影響が出ているのではないだろうか、と少しだけ神頼み気味に期待していたのだが、どうやらそれは叶えられなかったらしい。

問題の準決勝はギリギリ見ることが出来たのだが、やはりシユピーゲルはA G I型の弱点である火力不足感が否めなく、そこをV I T—S T R型の相手に突かれた形で敗北していた。

やはり、一点特化ステータス型の限界。B O B予選のような一対一の闘いでは、A G I型のキャラクター達によく見られるような展開だった。

「ま、A G I型を2回戦で倒した俺にとにかく言える義理じゃないけど……や」

俺の家の隣——要するに、詩乃の部屋。B O B予選が終わるなりログアウトした俺は、詩乃にあるお願いをするためにここへとやってきていた。置かれた折り畳み式テーブルを前に座り、詩乃が何やら用意をしている間に軽く思案を巡らせる。……その思考はどうしてもシユピーゲルの予選敗退に大半を占められていた。

2回戦の相手は絵に書いたようなA G I型のテンプレ。ひたすら武器や防具を軽くした結果、速度は恐ろしいレベルに昇華していたプレイヤーだった。……そう、速度は。

A G I特化型の戦闘スタイルは大体固定されている。速射力と回避力にものを言わせた接近戦。コレだけだ。

シンプルなかだけあって難易度もそう高く無く、ほんの少しの努力で初心者でも良いところまで行けるといいう、前には『A G I万能論』の

根幹となっていた戦い方であった……のだが。

今じゃそれが通用する敵は少ない。と言うより、それだけで通用する相手はB〇B本戦に出られるようなプレイヤーではない、という方が正しいのだが。

AGIタイプに対するテンプレ的な対策は幾つかある。

例えば、回避しきれないような弾幕を張ること。

AGI型のメリットを潰し、相手の少ないHPを削ることに注力する方法だ。俺の場合はこれに当たる。

他にも、先程の戦いでもあったように、AGI型の火力不足を狙い、VITでの体力や防御力に任せた突撃を行う方法などがある。これは前者と違ってデメリットを付く戦い方だ。これをしてるのは——そうだな。一番の有名所でゼクシードだろうか。

それに対する対策も有るには有るのだが、それを行えるのは一部の実力者だけ。残念ながら、シュピーゲルはそれが出来るほどプレイヤースキルも無かったというわけだ。

目を瞑って色々と考えていると、トンと言う軽い音と共に目の前のテーブルにコップが置かれた。その中をなみなみと満たしているのは、最近詩乃のマイブームになっているらしい緑茶。

「はい、幸人」

「ん、ありがとな」

コップを手に取り、軽く喉を潤す。詩乃はそのままテーブルの向かい側に座り、頬杖をついて俺を見た。

「で、話って何？ まさか明日のB〇Bで手を抜け、なんて事を言う訳じゃないんでしょ？」

冗談めかして言う詩乃だが、ある意味今から俺が頼むことと方向性自体は大差ない。軽く苦笑いを浮かべながら、俺は詩乃の瞳を真っ直ぐに見詰めた。

「なあ、詩乃。明日のB〇B本戦なんだけどさ——」

一度言葉を止め、大きく息を吸う。

「俺はゼクシードだけを狙うつもりだ。詩乃もアイツが狙撃圏内に居

「たら、積極的に狙ってほしい」

詩乃は俺の言葉に対し、不可解そうに眉を潜めた。

「それは『ゼクシードに勝ちたい』とかそういうこと?」

「違う。ゼクシードを優勝させたくないってだけだ」

「騙されて金を奪われたとかみたくないな個人的な恨み?」

「ん? ——ちよつと違うけど、まあそんなもんかな」

実際、クーとゼクシードにGGOでの直接の接点はない。

だが、新川くんの云々を除いても、アニメ版《MMOトゥデイ》でのゼクシードの態度は見ていて結構不快な印象を受けた。だから、あの意味個人的な恨みと言えばそれも取れる。

そう考え領くと、詩乃はそのまま身を乗り出して俺の瞳を覗き込んだ。暫くそうしていたかと思うと、不意に視線を外し、元の位置に戻る。

「……ええ。分かった。ゼクシードが狙えるような位置ならなるべく狙ってみる事にする」

詩乃の言葉に、お礼の意味を込めて黙って頭を下げようとする、手で押し止められた。思わず顔を上げると、詩乃の顔には不敵な笑みが浮かべられていた。

「……けど、あんたが近くに居ても容赦なく狙うから」

相変わらず、曲がった事は余り好きでないらしい。あくまで思考の片隅には置いておくが、敵は敵である、という考え方。

それが余りにも自分の知ってる詩乃らしくて、俺も静かに笑い返す。

「ああ、出会ったらあくまで敵同士だからな。俺も負ける気は無いけど……つと。そうだ」

あと、礼も兼ねて軽く情報を与えといてやるか。

「どうしたの?」

「詩乃。明日のB o B、ヘカート使った方が良いかも」

「……はあ? いや、アレはまだ慣れてないし、B o Bは個人の遭遇戦だから明日使うつもりは無かったんだけど……」

「それともう一つ。狙撃には気を付けろよ」

「? えつと……ええ。分かったわ」

不思議そうに、こりんと首をかしげる詩乃。

一応、このアドバイスにはある程度の意味が含まれている。詩乃には本戦で、なるべく長い間生き延びてもらいたいのだ。原作通りに2位で敗退してもらっては、ゼクシード撃破の難易度がぐつと上がってしまう。流石に、俺一人だけであいつを倒しきれる確率がそう高くないことは分かっている。可能性は、少しでも多くしておきたい。

不思議な忠告を受けた。

幸人と別れた後、私の思考は妙に気になるそちらへと傾いていた。狙撃に気を付けろ。そして——ヘカートを覚え。

元々、ヘカートを使うつもりは無かった。じゃじゃ馬である彼女を乱戦中に使いこなせる気はしなかったし、そう離れていないところからスタートするB0B本戦ではスナイパーライフが不利だと思っていたからだ。

だが——もしかしたら、それは違う?

幸人が、私が不利になるようなアドバイスをするような奴では無いことは知っている。

それを考えると、やはり——

……少し、作戦を考え直してみようか。

散々迷ってその結論に至ったのは、夜の10時のことだった。

幸人と第二回BOB I

BOB本戦では、1つの広いフィールドに30人のプレイヤーが押し込まれる。フィールドはステータスによる有利不利の偏りがないように幾つかの環境が設定されており、それを上手く利用することで相手を倒し、また長く生き延びる。

もちろん、本人のステータスも関わらないことは無いが、本戦において最も重要なのは——
ステージの使い方、なのである。

例を挙げよう。

例えばシノンのようなスナイパーは、自分は見付かりづらく、相手が見えやすいような……待ち伏せが出来る場所を基本的を選ぶとする。

俺のような身軽なSTR型だと、木が遮蔽物となるために狙撃されづらく、且つ3次元機動を活かせる森林が最も向いている。

このように、それぞれが得意なステージへと相手を誘導し、その利点を活かして敵を各個撃破していく。これが、基本的なBOBの戦い方だ。第三回のキリト達はその視点で見ると実に異常で、あれはタイプが違う二人が組むことによってステージによる不利な点をなるべくカバーし、後何より『主人公補正』とかいうチートなスキルを持っているから出来たことである。何それセコい。

だから俺にとつて、本戦開始地点が森林である、と言うことはとても嬉しいことであると言えた。実際に喜んでいたので。

始まって少し経った後に見た最初の衛星スキャンで、肝心のゼクシードの位置がマップの真反対と知るまでは。

「むう……」

鬱蒼と生い茂る枝葉に紛れ、緑色の迷彩服を身に纏った俺はなるべく下から見えにくいような樹の上の方に潜んでいた。衛星スキャンでは基本的に高度を表示しないため、今の俺を探すのは骨が折れるだ

ろう。それに何より、先程見たスキャンでは交戦可能域に入っているプレイヤーは一人も居なかったため、俺の所へと誰かが来る心配は無い。

取り敢えず一息付き、次に思考を向けるのはゼクシードについて。流石にマップの端から端まで行くとなると、絶対に何処かでプレイヤーと鉢合わせすることは想像に難くない。相手も相当の猛者なだけに無傷で切り抜けるなんて不可能だろうし、下手するとそれだけで死にかねない。

かといって、待つだけと言うのも難しい。同じ場所に止まっていればそれだけ奇襲を受けやすくなるためだ。

希望は相手から此方へ向かってくることなのだが――

「んなことしてくれるわけ無いだろうしなあ」

俺とゼクシードにそんなかわり合いが無い以上、彼がリスクを背負ってまで俺を狙う理由が無い。

シノンにはシノンでマップの南側――要するに俺の方が近いため、シノンを当てにするわけにも行かない。

「さてさて、どうするかな」

周りへの警戒を怠らないまま、俺は目を細めて小さく呟いた。

結局、私はヘカートを持っていかなかった。

幸人の注意を無視するようだが、流石に対等に戦う相手の言葉を鵜呑みにはできないし、しようとは思わない。幸人を信用していないわけではないが、言われたからと言って自分の考えを変えるつもりは無いからだ。

遠藤さんの時は自分でも彼女たちの態度に違和感を感じていたところがあったから話を聞いたが、今回はその限りではない。

ただ、『狙撃に気を付けろ』というもう片方の忠告は頭の片隅に置いておくことにした。と言うのも簡単で、なるべく拓けた所を移動するのは避けるのだ。それはそこまで難しいことではないし、私としても

狙撃されて即死なんていう呆気ない終わり方は望んでいない。

ただ、どんな風に注意しても勿論何処かに問題点は有るわけで。例えば、今回の場合は拓けた所では無いだけに、『視界が広くない』というものであったり。

崩れかけの家の壁に沿って静かに歩いていると、突然目の前に一人のプレイヤーが飛び出してきた。

「……ッー」

迎撃は間に合わない。

そう即座に判断し、その場へ伏せる。

この判断はほぼ反射的な行動で、正解と言える物ではなかったが——今回は偶々それが私を救った。

目の前に飛び出てきたプレイヤー。彼の注意が完全に彼が飛び出してきた路地の向こうへと向かっていたためだ。どうやら、彼は誰かから逃げている途中らしい。

それに気付き、バレるわけにはいかないと半壊になった壁の穴から慌てて民家に飛び込む。

姿勢を整え、割れた窓から視線だけを外へ向けると、逃げるのを諦めたのだろうか、先程のプレイヤーが廃ビルの陰に潜んだのと、もう一人。彼を追いかけてきていたのだろうかプレイヤーが見付かった。

追い掛けていた方の姿を見て、思わず息を呑む。

——薄塩たらこ。

GGO内で最も大きなスコードロンのリーダーである。GGO内で有名なプレイヤーを3人挙げろ、と言われればほぼ必ず入るであろうベテランだ。

彼は相手を追い詰めているにも関わらず、油断なく周囲を警戒していた。

どうやら、二人はここで決着を付けるつもりらしい。

漁夫の利を狙えるか、どうか。

数秒考えた後、私は窓枠に載せるようにして銃を構えた。

悩んでいても仕方ないと開き直り、狙撃に十分注意しながら森林地帯を歩いていると、ふと脳内に軽いアラームが鳴った。

「……………と。そろそろ時間か」

B o B本戦では出場者に小型の端末が配られる。これは15分毎に全プレイヤーの位置が配信されるという物で、試合に動きを持たせるためのアイテムだ。

俺はこれが見れるようになる1分前にアラームが鳴るように設定してある。余裕を持って見れるように、という考えである。

適当な藪の中に隠れ、端末を展開。

……そして少し待つと、衛星スキャンが始まった。

上からゆつくりと読み込んでいき、その南端付近、俺が今いる森林の所まで読み込んだ所で、俺は一番近くに居るプレイヤーの名前に、苦笑を禁じ得なかった。

「マジか…………『闇風』さんここで当たるのかよ」

向こうも近くに居る俺の名前を発見したのだろう、地図上から見ても分かる速度で俺の方向へと動き始めた。

待ち伏せのことなどはろくに考えていない——否、A G I特化型にとって、一番有効な待ち伏せ対策が『動くこと』だと知っているからこそこの動きである。

戦闘は免れ得ない。

仕方なく俺は、踵を返して森林の奥深くへと向かった。

逃げるためではなく、自分にとって最も有利な地形を活かすために。

幸人と第二回BOB II

まさに「忍者」。

闇風と戦闘してみて、感じたことはそれだった。

圧倒的プレイヤースキルによる状況観察力での居場所探知。AG I型のトッププレイヤーに相応しい熟練した立ち回り。そして、STRが低いくせに素早さが異常だから森のなかでの3次元ブーストも可能。はつきり言って、コイツも相当なチートだと思う。この人に勝ったゼクシードって一体何なんだってレベル。

木々が邪魔になり、AG I型のメリツトが薄くなるだろうと考えて森林の奥深くに戦場を移したと言うのに、これではまるで逆効果だ。まあ、だからといって、素直にはいそうですかと負けるわけにも行かない。

個人的には闇風にこの大会を優勝してもらい、シユピーゲルにAG I型でもまだ行けると言うことを再確認して欲しかったのだが、それも今回この勝負が起こった時点で夢幻に消えた。

俺が勝てばその時点で闇風が敗退。AG I型のトップがそんなに早く負けるとなると流石に新川の死銃化は免れ得ないだろうし、かといって逆も然りだ。俺が負ければ、恐らく原作通りに進んでしまい、闇風はゼクシードに敗北する。つまり、この戦闘が始まったという時点で、示す結果は1つしかなくなっているのだ。

「詰んでんじゃねえかよ……っ！」

新川の死銃化は、ほぼ確実に免れ得ない。

運命、というものを信じるわけではない。だが俺は今、それに嘲笑われているような気がしていた。

お前ごときがどれだけ足掻こうが、無駄なのだ。

お前ごときが何をしたところで、原作に大した差は出ないのだ、と。歯を食い縛り、俺を唾うその声を振り切ろうとするように両手に握ったガバメント2丁を闇風へ向けて乱射する。だが、移動中の闇風にそんなものがそうそう当たるわけがない。お返しと言わんばかりのフルオート射撃を樹の陰に隠れて避け、空になった弾倉を即座に入

れ換える。

逃げは許されない。隙を見せた瞬間に、殺される。

全力で地面を蹴り、大きく上に跳んで樹の枝に掴まると、俺が樹の幹から左右どちらかに出てくることを見越してM900Aを構えている闇風さんへと照準を合わせ——撃つ。

だが、不意はつけても人間が移動すればそれだけで音は立つ。出来るだけ小さくしようとしていた、俺が樹に掴まるその微かな音は、闇風さんにしつかりと届いていたらしい。身を翻して避けられ、再び俺の視界を弾道予測線が真っ赤に染めた。

「まずっ」

慌てて地面に降りたものの、避けきれなかった数発の弾丸が肩や顔を掠め、俺のHPを削る。

——こんなことなら、ショットガンでも持つてくるんだった。

ハンドガン2丁とアサルトライフル1丁だけで勝てる相手ではない。それに気付き、深く溜め息を吐く。

万全を期してB o Bに望んだはずが、蓋を開けてみれば準備不足に否が応でも気付かされる。ただひたすらにゼクシードを倒すことだけを考え、周りのプレイヤーを脇役扱いしていたことを漸く自覚した。第一回B o Bに参加していなかったため、B o B本戦についての意識が足りなかった、という部分も有るには有るが、どちらにせよ俺の考えが浅慮だったということだろう。

だが、泣き言を言っても何も始まらない。

俺は改めてガバメントをしつかりと握ると、闇風へと突撃した。

追う者と追われる者との戦闘は、驚くほどスムーズに終了した。

薄塩たらはは愛用のアサルトライフルを巧みに使い、相手に反撃の余地も残さないまま一方的に倒してしまったのだ。手練れ揃いのB o B本戦には珍しい、本当のワンサイドゲームだった。

GGO最強のスコードロンを率いているのは、流石に伊達では無い

ということだろう。……だが、さしもの彼と言えど、弾道予測線無し
の狙撃を避けられる筈は無い。

引き金に指を当て、着弾予測円の中心にたらこの姿を捉える。そし
て、彼の無防備な背中へと――

引き金を引く直前、突然近くで爆音が鳴った。

後から聞いた話だと、プラズマグレネードを腰に着けていたプレイ
ヤーが、遠距離からの狙撃によつて誘爆させられ、倒された際の音
だったそうだ。

私は想定もしていなかった突然の轟音に驚いてしまい、その際に銃
口がほんの数ミリずれた。

そこから放たれた、『たらこを貫くはずだった銃弾』は、轟音に反応
して身動きした彼のすぐ真横を通っていった。

しまった！

内心で小さく呟くが、外れてしまったものはもう戻らない。居場所
は恐らくバレただろうし、今自分が居るところの入り口はたった1つ
だけ。逃げることは不可能。

唯一の希望としては彼が先程の轟音に気を取られて私の場所に気
が付かなかつたという事だが――

そう甘い筈もない。案の定、たらこは私に気付き、その愛銃を油断
なく構えた所だった。

幸人と第二回BOB III

銃に弾倉を込め、引き金を引く。当然のごとく回避され、お返しと言わんばかりに俺の視界を埋め尽くす弾道予測線を回避する。

かれこれ数分、この戦いは続いていた。

本来、GGOの戦闘というものは意図的にでない限り、そう時間が掛かるものではない。まあ、一発一発が相当な威力を誇る銃ばかりなので当然とも言えるのだが——どちらかというと今回のコレはそういったタイプの戦闘ではないためだ。

AGI極特化の回避速度を持つ闇風と、回避がかなり得意な俺。つまり、今起こっている戦闘は『相手に避けられること』を前提とした、相手のミスによる決定打を待ついわゆる消耗戦なのである。

跳ねる、駆ける、撃つ、避ける。

この応酬の繰り返し。完全にじり貧だ。しかし、今はそれでいい。衛星スキャンを見て、俺と闇風の戦闘の漁夫の利を狙う第三者が来てくれるだけの時間を入手さえすれば、この一見詰んだ状況も改善できるかもしれない。

だが、俺は気付いていなかった。

度重なる睡眠不足。そして慣れない——それどころか苦手ですらある長時間連続のフルダイブを繰り返していた俺の脳は、既にほぼ限界を迎えていたと言うことを。

そして、そこに脳への負担を上乗せするとき『アサルトライフルのフルオートの弾丸を計算し回避し続ける』という行為。

限界を迎えた脳は、思考とは裏腹に、俺の意識を切^{シャットダウン}断した。

* * *

接近戦の能力が問われるような室内戦闘で、ステータスや技術他諸々が負けている私がたらくに勝てるわけもない。

先程追い掛けられていたプレイヤーと同じく、私もすぐにやられて

しまった。

……主観的に見ても客観的に見ても、一方的な戦闘だったと思う。やはり、私はアタッカーよりもスナイパーが性に合っているのかもしれない。そうすると、幸人のアドバイスも正鵠を射ていたのだろう。

今回の大会の反省点を浮かべ、どうやって次に活かすかをじっくりと考えていく。

他の小規模な大会と違い、B○B程の大きい大会にもなると、八百長等には随分と厳しくなる。その対策の1つとしてあるのが、死んだプレイヤーは大会が終わるまでその場に居続けなければならないというルールである。

と言っても、大体二時間程度も掛かるB○Bなので、その間にプレイヤーを退屈させないよう、プレイヤーがいる待機空間には試合の継モニターが置かれているのだが。

私は中継画像に視線を向けながらも流し見程度にしか見ておらず、思考は作戦を練ることに費やしていた。

大会が終わったのは、私がやられてから大体30分後くらいのことだろうか。ゼクシードが闇風を制してガッツポーズを決めた姿が全国放送された少し後。私の眼前にリザルト画面とログアウトまでのカウントダウンが現れた。

のんびりとスクロールする。

一位、ゼクシード。二位、闇風。少し空いて六位に薄塩たらこ。私の名は十六位の所にあった。

「幸人はどれくらいなのかしら」

独り言を小さく呟き、下にスクロールする指を進める。

そして……

「……………え？」

《通信切断者》の欄に、クーの名を見つけた。

詩乃の本音

——目が覚める。

真っ先に見えたのは、見慣れた天井だった。先程まで視界にあった鬱蒼と生い茂る森林ではなく、自分の部屋のものだ。それに気付くのに、そう時間はかからなかった。

「——っ」

訳が分からないまま体を起こそうとすると、鈍い頭痛が走った。思わず顔をしかめて頭を抑える。

痛みが収まり、少し経った後。

ところで——

何で俺、自分の部屋に居るんだ？

ろくに回らない頭で、それでも真っ先に脳裏に浮かんだのはその事だった。

ついさつきまで闇風と戦っていたはずなのに、なぜ今俺はここにいるのか、という単純な疑問である。

普通に考えれば、大会が終わってログアウトした後、寝落ちしたんだろうが……その記憶が全くない。

記憶が無くなるほど激しく戦ったのかとも考えたが、それとは何だか違う気がする。

俺が一人首をかしげていると、不意に。洗面所から詩乃がひよこつと顔を出した。そして、俺の姿を見て少し安堵したように息を吐く。

「あら、起きた？」

「……詩乃？」

何で詩乃が俺の部屋に？

その疑問が余程顔に出ていたのか、詩乃は「ちよつと待ってて」と心持ち固い声で答えると、再び洗面所に顔を引っ込めた。

「……？」

何をしているのかは気になるが……まあ、詩乃のことだ。多分変なことはしないだろう。

そう割り切って意識を別のことへと持っていく。

ああ、そう言えば。

起きてから訳の分からないことの連続ばかりで頭が混乱しているが、取り敢えず起きて着替えるべきだろう。

「よつと……つと？」

そう考え、ベッドから出たは良いもの——

いざ立ち上がろうとした途端、目眩がして再びベッドへと座り込んだ。

何故だろうか。さつきから、自分の体が思うように動いてくれない。

不思議に思つて首をかしげていると、洗面所から詩乃が出てきた。手に持っているのは濡れタオルと——俺の寝間着。

「まだ寝てなさい。熱酷いんだから」

そう言われて、ようやく自分が風邪を引いていたことに気付く。さつきから思考が上手く回っていないかったのもそのせいかもしれない。

納得してそのまま寝ようと——したところで、それよりも気になることがあることに気付く、勢いよく体を起こす。そう、今は俺の不調なんかよりも、新川の死銃化を阻止できたのが問題だ。

「BOBはどうなったんだ！ 優勝したのは!?!」

詩乃は普通ではない俺の剣幕に少したじろぎながらも小さく溜め息をついた。

「……それより前に、私も幸人に聞きたいことが幾つか有るんだけど」

そして、視線を尖つたものに変える。

「——何でこんなになるまで無茶したの？」

* * *

何故こんなになるまで。無茶をしたのか——

私がそう問うと、幸人は視線を虚空にさ迷わせた。

……いつもこうだ。

彼は私を誤魔化すための言い訳を探すときには、いつもこうやって

私から目を逸らす。

幸人は気まずそうに一瞬顔を伏せた。

「……えっと……まあ、ゼクシードに優勝はさせたくなかったからさ」
「——ふざけないで」

いつもなら頼ってくれないことに少し不満を覚えながら引くところだが——今回は流石に我慢できなかった。

アミユスフィアに強制切断されるほどの無茶な行為をしていたのだ。まさか、それだけのためである筈がないだろう。

「ふざけるなって……何がだよ」

「そうやって誤魔化すのをやめてって言ってるの」

私の言葉を聞いた幸人の瞳が、少し揺れた。

「……別に何も誤魔化してない」

「嘘。たったそれだけのためにアンタがそこまで入れ込む筈が無いもの。今だって自分の体よりB o Bなんかの試合結果を気にしたり……」

断言すると、幸人は気分を害したように眉を潜める。

「詩乃だって俺の全部を知ってるわけじゃないだろ。そう言いきれる訳がない」

「それくらいは分かるわよ。ずっと隣に居たんだから。何年の付き合いだと思ってるの?」

「……っ。……もしそうだとしても、詩乃には関係ないだろ」

——お前には関係ない。

そう言いきられ、私は自分の頭にカツと血が登るのを感じた。

パン、と乾いた音。

それが、自分が幸人の頬を叩いた音だと気付いたのは、その少し後だった。

怒りを抑えきれないまま、怒鳴るように叫ぶ。

「ふざけないで! 何も言わずに黙って無茶して! 相談もせずに心配かけて! 話を聞こうとしたら誤魔化して……挙げ句の果てには

『お前には関係ない!?!』」

視界が滲む。声が掠れる。頬を熱いものがつうつと流れていく感

覚があつた。

「もう一度……ううん、何度でも言うわ」

一息おいて、幸人をしっかりと見据える。

「ふざけないで」

私は震える声でそう呟くと、踵を返して幸人の部屋を後にした。

幸人の迷い

——よくよく考えると、俺が詩乃とこんなに本格的なケンカをするのは初めてかもしれない。

詩乃が部屋を出ていった数時間後、疲労からか気絶するように眠りに落ち、ついさつき目覚めたばかりの俺は、自室のベッドの上で寝転がりながらそんなことを考えていた。

今までは俺の方が大分長く人生やって来てるので、精神的に余裕もあり、小さな言い合いこそあれケンカはやってこなかった気がする。まあ、単純に詩乃が好きだから詩乃とケンカしたくないってだけだったのだが。

落ち着いて思い返してみれば、この件で悪いのは確実に俺だろう。疲労とストレスが重なり、イライラしていたのは兎も角、それにしても『詩乃には関係ない』ってのは流石にどうかと思う。うん。

まあ、だからといって詩乃が要求しているように、俺の事情を話せるわけは無い。神様転生だなんて信じられる筈がないし、よしんば信じてもらうことが出来たところで、どうだ。詩乃との関係が崩壊するのが関の山だ。

だってそうだろう？

詩乃は虚構フィクションの存在で、俺はそれを読んでいた3次元の人間読者だ。

詩乃からすれば自分の知らない自分を見て、その上わざわざ自分の隣へと引越してきて、今の今までのうのうと仲良くしてきた人間。

そんな俺に対して、嫌悪こそ抱こうが——続けて仲良くしてくれる筈も無い。

俺だって、詩乃に隠し事をしたくはない。だけど、仕方がないじゃないか。その隠し事を明かせば、きつと俺は詩乃に拒絶される。そう考えたら、言えるわけがないんだから。

体を起こし、膝を抱えて顔を埋める。

「……はあ」

思わず、溜め息が漏れた。熱のせいか思考が上手く回らないし、ネガティブな方へと考えが向いてしまう。

——そう言えば、何で俺はあの時、この世界に転生することを選んだんだっけ。

神様に転生させてもらった時のことを思い出す。今考えてみると、あの世界に行くと即座に決めたのは詩乃を守るため、だったような気がする。PTSDに苦しめられ、同級生に苛められ、挙げ句の果てには一番信賴していた唯一の友人からも裏切られる。……そんな彼女を、守りたかったからだと思う。

今、俺は詩乃を守れているんだろうか

——いや、違う。そもそも、俺が守る必要なんて、最初から無かつたんじゃないか？

そう思うと、不意に怖くなった。自分の存在価値がこの世界に無いことに気付いたからだけではない。自分のせいで原作とは違う道のりへ進み、詩乃が死んでしまうかもしれないと気付いたからだ。

「……………は」

そんな風に泥沼化していく思考を中断させたのは、背筋に走った悪寒だった。

軽く身を震わせ、思い出す。俺が着ている今の服は、BOBの本戦からずっと同じままだった。当然、既に熱による汗でぐっしりと濡れている。そう言えば、詩乃が寝間着持ってきてくれていたはずだ。嫌な考えを吹き飛ばそうと頭を振り、誰に向けるわけでもない小さな呟きで自分を誤魔化しながら俺は置いてあつた着替えを手を取つた。

ひ弱そうな青年——新川恭二は、自室に籠り、自身の端末をじつと睨んでいた。端末に写し出されているのは、満足そうに笑っている一人の男と、それに対する軽いインタビュー等も乗っている。今回のBOBの優勝者である、ゼクシードだ。

『AGI特化型はもう古い。これからはVITやSTR重視の時代だ』

インタビューの真ん中辺りにデカデカと書かれた、シユビーゲル自分の存在を
真っ向から否定するようなその文面を声に出して読む。彼のその声
は掠れ、か細かったが、確かにそこには抑えきれない憎悪や怒り――
そういったものが含まれていた。

幸人と新川

仲直り、というものは案外不思議なものだ。

喧嘩が起こった原因が大きければ大きいほど、仲直りしようと思っても中々出来ないが、気づけばいつの間にか隣にいたりする。

でも、今回の事はそう簡単に解決することではない。何となく、そんな予感がしていた。

詩乃を納得させられるだけの言葉を俺が持っていない以上、ただ謝れば良い、と言うわけにもいかない。

別に、詩乃が俺を避けている訳ではないのだ。学校に行く時間はほぼ同じだし、行動圏内が同じだから休日は買い物に行けば三割くらいの確率で遭遇する。詩乃の方も俺を避けようとするどころか、わざわざ俺が謝れるタイミングを作っているような様子だ。

なのに俺が謝れていない、仲直りが出来ていないのは、俺が詩乃に對して勝手に壁を作ってるから。

俺が所々を濁しながらもそこまで説明すると、

「……って言っても、やっぱり謝るしか無いんじゃないかな。僕は二人についてそこまでよく知らないからこんな適当な事しか言えないんだけど」

新川はそう苦笑してコーヒークップを手を取った。

都内のとある喫茶店。そんなに客が来ない、秘密基地じみた静かなところで、俺は新川へと詩乃についての相談を持ち掛けていた。勿論これの目的としては、ゼクシードが優勝してしまった後の新川の様子見も兼ねていた。

「でも、説明しなかったから詩乃は怒ったのに、謝ったときにその事について黙ったままだったら仲直り出来なくないか？」

「……うーん、僕は朝田さんが怒ったのはクー……こほん。工藤くんが『関係ない』って言ったからだと思うな」

「確かにそれも有ると思うんだけどなあ……。それより前には既に詩乃にふざけるなって言われてるわけだし」

「話を聞いている感じでは、そうだと思うよ？　そう言われたのも、嘘を

つこうとしたのが朝田さんに気付かれたからじゃないかな」

「……言われてみれば確かにそうかもしれない」

長い付き合いだし、嘘がバレるっていうのは分かる。俺もそうだが、細かな動作の変化や雰囲気はどうしても分かってしまうのだ。詩乃としては、真面目な話をしている最中に俺が嘘をつくのに気付けば、ふぎけるな、と言いたくなるのも当然のことだろう。

少し冷めたコーヒーを一口飲み、椅子に背をもたれさせる。少し古びた木製の椅子が、キィ、と音をたてて軋んだ。

「……まあ、何にせよ謝るしかないか」

「うん、そうだね」

俺の小さな呟きに、新川はにこやかに微笑んだ。……本当に、悪いやつには思えないんだが——さて。

「そう言えば新川、最近GGOには潜ってるのか？」

少し、こちらの話もしておくでしょう。ログイン状況自体は俺の端末の方からでも確認できるのだが、話の起点には丁度良い。

俺の言葉に、新川は少し表情を陰らせ、乾いた笑みを浮かべた。

「うん、時間有るときはログインしてるよ。AGI特化じゃソロは辛いから何人かで組まないとダメだけど、ね」

——やはり、ゼクシードのインタビューのせいでAGI型の需要は大分減ってきているらしい。

新川が言ったようにAGI特化は他の力を借りなければモンスター狩りやスコードロン戦が出来ない。しかし、言い方が悪いがAGI型がモンスター狩りには役立たずなのだ。火力は取れないし、出来ることと言えばせいぜいが相手の気を引く程度。

体が小さなアバター、かつ背景に紛れるような迷彩服、そして相当の機転と判断力でもあれば対スコードロンもそれなりには出来るのだろうが。

元々AGI型自体の需要は低かったのだが、ゼクシードのAGI特化型否定がそれに拍車をかけた。新川の恨みがゼクシードへ向かってしまっても、仕方ないと言えば仕方ない。

何も言うことが浮かばずに黙った俺を見て、新川は席を立つと

「お互い、色々と苦労してるね」
そう、苦笑した。

詩乃への謝罪

「詩乃——ごめん」

そう謝ったところで、俺に隠している事がある以上、俺と詩乃の間にある溝は決して埋まらない。

分かっているながらそれには触れずに謝った俺を、詩乃は微笑んで、許すとは一応言ってくれたものの。俺と詩乃の距離は喧嘩する前よりも微かに——しかし確かに離れていた。

* * *

別に、幸人が嫌いになったわけではない。もう怒ってもいないし、事情を話してくれないことについても理解は出来る。私だって幸人相手に私のことを全て打ち明けられるかと言えば、首を横に振るからだ。

だが、理解が出来ることと納得できることは全く違う。私は幸人に頼ってほしいと思っっているし、悩み事があるなら解決してあげたいと思う。それが、私を守ってくれた幸人に対するせめてもの誠意だから。……幸人が苦しんでいるのを見ると、私も苦しい。

でも、実際は幸人が私を頼ることはなかった。——いや、この前の意図がよく分からないお願いを含めなければ、だが。

「——はあ」

一緒に待ち伏せしている、SQSとは違うスコードローンの仲間にバレないように、小さくため息を洩らす。

このスコードロンに入ったのは二週間前。彼らはクーと離れ、ソロで行動するようになった私を誘ってきたのだ。一人一人の実力はB o B本選に残れるほどは高くないものの、連携が得意なP v P専門のスコードロンで、特に断る理由もなかった私はすぐに承諾した。次のB o Bのためにはもつと実力者が多いスコードロンに入るべきだと分かっていたが、何となくそういう気分でなかった、という理由もある。

「シノンさん、行きますよ」

一緒に待ち伏せしていた、武骨な男性アバター——このスコードロンのリーダーだ——がこちらを見ることもなく淡々と呟く。彼は手にもったサブマシンガン、イスラエル製のUZIを油断なく構え、黙々と走り出した。「ええ」と小さく呟いて頷くと、私も後に続く。

少数の前衛が不意打ちで気を引き、程々に相手を釣り上げてから、待ち伏せしていた人員で一気に叩く。

このスコードロンは本当に連携に手慣れている。安定感がある、とてもいべきだろうか。クー達と組んでいた時のあのスコードロン戦とは大違いだ。

——そういえば、クー幸人は今何をしているんだろう。

戦闘に集中しなければならぬことは分かっているのだが、ふとそんなことが頭を過り、胸がチクリと微かに痛んだ。

『AGI万能論なんてものは所詮、単なる幻想なんですよ！』

キー俺の高い男の声が、酒場に響く。

クー新とシユ川ピーゲルの2人で何回か来たことのある大きめの酒場。俺はなるべく無感情に、しかし何かを祈るように手を組んで一つのテーブルに向かっていた。いつもは付けていないような迷彩色のパーカーを着て、フードを深めに被り、正体を隠すように。

どこからでも見られるよう、酒場の真ん中に高く浮かぶ四面ホロパネルには、明るめの青色の髪をした気障っぽいアバターがデカデカと映り、自慢げに自らの主張を語っている。

——多分、ここの筈だ。

記憶にある、アニメで見た時の光景がここと酷似している。もしかしたら違うのかもしれないが、その時はその時だ。今は、どうなったかだけが知りたい。

ざっと店内を見回したところ、黒のギリースーツを纏った細身のアバターはそう多くない。まあ、広い店内だから見落としている可能性

もあるが。

深く息を吐く。やはり緊張しているらしい。それもそうだ。もうすぐ、友人である新川の運命が決まろうとしているのだから。とは言っても、ここまで来ると俺に出来ることは何も無い。薄情なようだが、なるようになるしか無いのだ。

ウィンドウに映る時計が指すのは2025年11月9日午後11時24分。死銃が動きを見せる筈の30分までそう時間は無い。

俺はもう一度深く息を吐くと、目をつぶって組んだ手に力を込めた。

幸人と死銃

『AGIアジリテイ万能論なんてものは単なる幻想なんですよ!』

キーの高いその男——ゼクシードの声を聞き、不快さに眉を顰める。だが、この声を聞くのももうこれで最後だろう。そう思うと、少しの背徳感と共に高揚感が湧き上がってくる。

もうすぐだ。??だが、まだ時間ではない。

広い酒場の中央に浮かぶ四面ホロパネルを睨むように見据えながらも、視界の端に映る時計を意識し続ける。

あと数十秒。腰のホルスターに入れてあるハンドガンの存在を確かめるように、ぐつとグリップを握り、そして放すことを繰り返す。

——時間だ。

ギリースーツのフードを改めて深くかぶり直すと、静かに立ち上がった。店の中心にあるホロパネルに向かって、テーブルの間をゆつくりと歩いていく。

——ふと、酒場の中に見慣れたアバターの姿を見掛けた気がして、歩く速度を緩めて視線だけを振り向かせた。だが、そこにいるのは馬鹿話を繰り広げている愚鈍なプレイヤー達のみ。見慣れた茶髪のアバターは何処にも居ない。

(それもそうだよね??)

鉢合わせしたら決心が鈍るかもしれない。それを避けるために、この時間帯に彼がどこにいるのか、それを数週に渡って調べた。そしてわざわざ、彼が最近来たことがないこの酒場を実行地点に選んだのだ。だから、彼はここに居るはずが無いのだ。大方、背格好が似ているアバターを見間違えたとか、そんな辺りだろう。いや、そうでなくてはならない。

だが??微かに何処かで彼には期待していた。友人である彼なら、もしかすれば自分を止めてくれるかも、と。

だが、そんな奇跡は起こらない。

気を取り直すように頭を軽く振ると、再び歩き出す。決心をもう一度固め、懐のホルスターからハンドガン《五四式・黒星》を取り出した。

初弾を装填し、銃口を画面の中のゼクシードの額へと向けた。

愚か者たちよ??恐怖するがいい。

次第に自分へと視線が集まってくるのを感じる。だが、その方が好都合だ。多くの者達に恐れ戦かれてこそ、自分^{死銃}は自分^{死銃}たりうる。

「ゼクシード！ 偽りの支配者よ！ 今こそ、真なる力による裁きを受けろがいい！」

出せる限りの大声で叫ぶ。

左腕を持ち上げ、指先から胸、左肩から右肩に触れて十字を切った。

そして——トリガーを絞る。

銃声。だが、当然ながら銃弾はホロパネルを貫通することもないまま、弾けて小さなエフェクトを散らした。

しかし、自分は知っている。ここから起きることを。達成感を覚えながら、少年はニヤリとほくそ笑んだ。

ゼクシードのアバターがログアウトしたのを確認し、ギリースーツの男——死銃は酒場を見回した。

「これが本当の力、本当の強さだ！ 愚か者どもよ！ この名を恐怖と共に刻め！」

機械を通した声を聞きながら、俺は席を立ち、踵を返して酒場の出口へと体を向けた。ここからは、見る必要も無い。

歩きながら、小さくため息を吐く。

「はあ??」

新川の死銃化の阻止が無理だった、と知ってなお、案外自分の気持ち荒れていないのが不思議だった。何故なのだろうか、と自問してみると、案外答えは簡単に見つかった。

原作を読んでこの世界に望んでいた俺にとって、どうしても新川Ⅱ

死銃というイメージが心の奥底にあったからだ、と。思い返せば、これまでの付き合いだっただけ俺からは何処かに一線を引いていた。向こうは気を許していてくれたにも関わらず、俺からはそうではなかった、ということだ。

「結局、原作に引き摺られてんなあ??」

銀行強盗、B O B、死銃。

どれも、俺が何とか出来る可能性のあった事件ばかりだ。それでも阻止出来なかったのは、俺が動くことよって起きる原作との差異を怯えてしまい、その出来事への関与に本気になり切れなかったからだろう。

「新川には悪い事したな」

最後に小さく呟いて酒場を出ると、俺はウインドウを開いてログアウトボタンを押した。

幸人と準備

死銃事件が起こり始めたのを確認してから俺がしたことは??と言うより、俺に今出来ることはほぼ一つだけ。アパートの防犯の強化である。

何故そんなことをするかと言えば——そもそも、死銃事件の手口は解除履歴の残らない古い型の電子錠を病院で入手した緊急用のマスターコードで解除し、フルダイブしている無防備なプレイヤー本人に毒薬を打ち込む、というものだ。

最新型の、とは言わないまでも、解除履歴の残る型の電子錠を使えば、誰かが侵入したことが分かり、死銃の伝説性は非常に薄れる。死銃が伝説になることを目的としている彼らが入れるとしても、入るかどうかは怪しくなるということだ。そして、電子関連を受け付けられない鍵穴式の錠を取り付ければ、尚のこと死銃が部屋へと侵入できる可能性は低くなる。??いや、ゼロになる、と言っても過言ではない。

そのために俺は、まず自分の家へと電話をかけた。

軽い世間話から、最近の東京は物騒になっている、電子錠を解除して侵入するような輩もいるらしい——と上手い具合に話を持っていくと、母は

「ははーん。??つまり幸人は、詩乃ちゃんが心配なわけね?」

「??なっ、違っ」

「で、不安になって電話を掛けてきた、と。ふーん、なるほどねえ。??まあ、朝田さんの所には話しておくわ。うちの息子が詩乃ちゃんの事を心配して夜も寝れてませんって」

「そこまでは言っていないだろ!」

反射的にそう叫ぶも、既に電話は切れていた。どうやら、話し始めた時からほぼ全てを察されていたらしい。

??やっぱり親には敵わない。その事を改めて認識することになった。

後、出来ることと言えば仲直りだけ??なのだが、空いてしまった溝

を埋めることの出来る機会が見いだせず、俺と詩乃の関係は宙ぶらりんのまま時間だけが過ぎて行つた。

その間に俺は新川の様子を見に彼の家を訪れてみたり、砂漠地帯でエンカウントした鈍いピンク色の小さなプレイヤーと戦ったり、新たな武器調達のために深いダンジョンにシユピーゲルやシノン巻き込んで突撃したりと色々なことをしていたのだが——まあ、その話は今することでもないの、後々語る機会があれば語ることにしよう。

とても広く広がり、多種多様なゲームが作られているVRMMOと言えど、自らの羽で空を自由自在に飛ぶことが出来るゲームはALOを置いて他には無い。

久しぶりに感じる、飛行中の風の心地よさに目を細め、俺は待ち合わせの場所へと向かつていた。

最近GGOに掛かりきりだったので、こちらへ来るのはかなり久しぶり。最近ご無沙汰気味だった、ケツトシー領主であるアリシャ・ルーに軽く挨拶だけしておいて、俺は本来の目的を行うために新生アインクラッドへと飛び立った。

約束の相手には既にメッセージを送っており、彼女ももうそろそろ着いている頃だろう。

「??つと」

約束の場所——圏内である小さな廃墟へと降り立った俺は、腰に吊った鞘から、ゆつくりと本来の愛剣である片手剣を抜き放った。軽く振り回し、感覚を確認する。

重さの違いから感じる違和感に眉を潜め、剣をもう一度片付けると、次に俺はケツトシーの街で見繕ってきたもう1本の細剣を取り出した。数回振り回し、間合い、重量の面で光フオートンセイバー剣と感覚がそこそ近いことを改めて確認すると、一人頷き、約束の相手を待つ。

だが、その時間もすぐに終わった。

「ごめん！??待たせちゃった?」

金髪のポニーテールを揺らし、風の妖精随一の剣士——リーファがやって来たからである。

「いや、今来たとこだ。悪いな、休日なのに付き合わせちゃって」「ううん、丁度私もこっちの剣の腕が訛ってないか確認したかったところだし??. 他ならぬケットシーの親衛隊長様からのお願いだったから」

リーファは剣を取り出すと数回素振りし、満足行ったかのように「よし」と呟くと、少し意地悪げにそう笑った。

「そういうので受けるのはやめろって言っただろ??. これは俺個人でのお願いなんだから、ケットシーがシルフに借りを作つたみたいになつての」

「ごめんごめん」

軽く謝ると、リーファは静かに剣を構え、俺を睨んだ。

「確か??羽を使うのは無し、だったよね?」

俺も頷き、片手剣ではなく、細剣の方を構える。

「そういう事だ。あと、デュエルじゃなくて圈内での模擬戦。それだけかな」

「何でそんなルールにするのか分かんないけど??うん、了解」

何でわざわざALOでこんなルールで模擬戦を行うのか、と云えば、当然、来る第3回B O Bのためである。キリトと真正面から戦つて勝てるよう、彼に勝てるだけのレベルの剣士と戦闘経験を積んでおきたかった、という訳だ。勿論、GGOにそこまでの剣術スキルを持つプレイヤーは居ない。

ALOにも数えるほどしか居なかったが、知人にいるプレイヤー達、特にその中でも一番頼りやすい相手——面識のあったリーファへと頼んだのだ。

因みに、デュエルじゃなくて模擬戦である理由は、単純に武器性能の差が看過できないものだからである。街で買える安物と、高位武器ではぶつけた時にすぐ安物が壊れるのは想像に難くない。

と、こんな理由があるわけだが、それを教える必要も特にないだらう。

「まあ、付き合ってくれるんだから、遠慮なく行かせてもらおうよ??つと！」

細剣を構え、俺は地を蹴った。

——ちようどその頃、銀座のとある喫茶店で。古ぼけたレザーブルゾンにダメージジーンズという出で立ちの一人の青年が、スーツ姿の若い男性と向かい合って座っていた。

やがて、夢中でプリンをパクついていた若い男性の方は、顔を上げ、無邪気に笑った。

「やあキリト君、ご足労願って悪かったね」

そして、原作が始まる。

原作

クーとキリト

第3回B O B予選、当日。

いよいよ原作が開始するという事への期待と緊張をないませにしながら、俺はシノンと2人でぶらぶらとGGOの街を歩いていた。

今は午前11時。キリトのアバターがコンバートしてくるのが大体午後1時だから、あと2時間までにシノンには大会のエントリーをしてもらわねばなるまい。

詩乃の部屋のセキュリティを強化した今、目下一番の問題は『主人公であるキリトが、原作通りシノンを落としてしまう』可能性だ。その可能性をほぼ限りなくゼロに近づけるためには、シノンとキリトのファーストコンタクトを総督府にする必要がある。何ならシノンには、キリトはあくまで有象無象の敵の一人、として認識してもらっても構わない。むしろその方が俺としては嬉しい。

ハーレム、ダメ、絶対。

そうなると、一番安全なのがシノンには午後1時に総督府でエントリーしてもらう、という作戦である。しかし、それではキリトがシノンに案内してもらうことが無く、B O Bにエントリーすることが出来なくなる可能性がある。だから、原作の装備を知る俺がキリトをスムーズに案内し、午後3時前には二人揃って悠悠エントリーすると、そういう予定だ。

その作戦を成功させるため、俺は時計を逐一確認しながら、シノンを上手いこと総督府へと近付けられるように誘導して行った。

「なあ、シノン！ あっちの店に行かないか!？」

「え？ わ、分かったわ」

「なあシノン！ あの店行こうぜ！」

「え、ええ?!」

「なあシノン！ 先に大会エントリー済ませといてくれないか!？」
「はあ？ ま、まあ、別にいいけど?？」

こんな風に。

はいそこ、不自然すぎるとか言わない。俺としても必死なんだから。

当然、詩乃も納得の行っていない表情だったが、特に反論する理由もなかったのか、俺の予定通りにエントリーを済ませてくれた。端末の操作を終えたシノンが、こちらを振り向く。

「ゆき??クーはまだエントリーしないの?」

「俺はまだかな。ちよつとやっておきたいこともあるし」

俺の返答に、シノンが首を傾げる。

「何か用事？ 何なら私も付き合うわよ」

「いや、いいよ。俺個人の野暮用だからさ」

「??そう」

俺が首を振ると、シノンは数秒何かを考える素振りを見せた後、小さく頷いた。そして、俺を気にするかのようには、チラチラとこちらの様子を窺う。

しかし、時間が押している俺はそんな事に気付かず。

「じゃあ、俺は用事あるから!」

手を振って、シノンと急ぎ分かれた。

「??怪しい」

一人残ったシノンの眩きは、風に消えて俺の耳には届かなかった。

あらかじめ調査をしておいたため、原作でシノンとキリトが初めて出会う場所の見当は既に付けている。映像化作品万々歳である。寧ろ、俺としては何故あの時間帯にシノンがここを歩いていたのかの方が気になった。

何か用事があつた訳では無いだろうし、恐らくこの辺りをぶらぶらしてただけだろう、とは思っただが。

俺は少し暇そうな雰囲気を漂わせながら、シノンとキリトが初めて出会った場所をのんびりと歩いてた。

よくよく考えてみると、これって聖地巡礼じゃなかろうか。いや、実際にここが舞台になる事を考えれば、ただの聖地巡礼よりもレベルが高い気がする。例えるならそう、ドラマのセットを使って俳優さんたちと同じドラマを演じているような??ってこれ聖地巡礼じゃなくて普通に出演者じゃないか???

そんな風に考えて、少しテンションが上がったその時、背後から声が掛けられた。少しハスキーな、しかし普通に女性アバターの声として通用しそうな——そんな声。

「あの一、すいません、ちよつと道を?。」

取り敢えず、話し掛けてもらう、という第一難関はクリア出来たようだ。

なるべく相手に不安、不快感を与えないよう、にこやかに、苛立たしげにも見えない普通の表情を意識しながら振り返る。ここでキリト側に、声を掛ける相手を変えられたら余りにも虚しい。

原作でのシノンのセリフをほぼ完全にトレースし、同じように振る舞う。

「??こ、このゲームは初めて? どこ行くの?。」

失敗。

微妙に声裏返った気がするし微妙にどもった。これじゃあ完全に女性プレイヤーに声を掛けられた童貞の反応だ。傍から見たら変わんないか。俺としてはある意味尊敬の対象であるキリトから声を掛けられて緊張してるってのも有るんだが??それが本人に伝わりうはずもない。

俺に声を掛けた本人——原作主人公のキリトは、そんな俺を見て苦笑いを浮かべた。早くも声を掛ける相手を間違えたと後悔してるのかもしれない。

それにしても、原作通り確かにそのアバターは一見美少女だった。

いや、元からの知識が無ければ何度見ても美少女だ。

背は低く、とても華奢。腰まで伸びた髪は艶やかな光沢を放っている気がする。思わず見蕩れてしまうほどに綺麗だが??コイツは男なんだ。

??コイツ本当に男なんだよな？

「あー、えつと??」

俺がそんな疑問に内心で悩まされていると、キリトは少し逡巡した末、再びその小さな唇を開く。

「はい、初めてなんです。どこか安い武器屋さんと、あと総督府っていう所に行きたいんですが??」

「安い武器屋と、総督府??ね。ふうん、もしかしてB O Bにでも出るつもり?」

「え、ええ??まあ」

「ほほー。コンバートしたてなのに中々チャレンジだね??。じゃあ、強い装備は必須なわけだ」

俺はそう言いながら、自らのネームカードを取り出した。最初のコンタクトで、ここを取り入れることは絶対に必要だ。キリト本人に変な勘違いをされなくて済む。

キリトも慌ててネームカードを実体化させ、俺へと渡す。お互いにそれに目を通しあつた後、

「俺はクー。よろしくキリト」

「お、おう。こちらこそよろしく」

手を差し出して握手を交わすと、俺は武器屋へとその足を向けた。

そして、そんな2人を物陰から見つめる影が一つ――

「??誰よあの女プレイヤー」

シノンと勘違い

「で、キリトは何か好きな種類の銃とかは有るのか?」

「え、えっと??特には無い、かな」

「了解。??じゃあ色々揃ってる大きいマーケットに行くので良し??つと。因みに、ステータスのタイプは聞いておいても大丈夫か?」

「多分筋力優先、その次が素早さ——だと思う」

「ん、了解」

キリトと軽いやり取りを交わすが、俺にとって、この行為は特に意味があるものではない。最初からキリトが何を答えるかは予想が付いていたし、既に行く店も決めていた。だが、これを聞いておかなければキリトに怪しまれる可能性がある。ラノベ主人公の勘の良さは、恐らく並大抵の物では無いだろうから。

入り組んだ路地を通り抜け、大通りへと出ると、俺は目の前に見えるきらびやかな店を指差した。

「目的地はあそこ。色々置いてる初心者向けの総合ショップ」

「な??なんだか、すごい店だな」

独特な雰囲気に対し気圧されつつ、キリトは苦笑いを浮かべた。確かに、NPCの美女達がゴツイ銃を持っている光景を見ると色々複雑な気持ちになる。俺もこういった光景に慣れるまでに少し掛かった。

「さて、何を買うか??だけど。コンバートしたばかりだと、金がなあ」

俺が呟くと、思い出したようにキリトは右手を振って自分のウインドウを出し、所持金額を確認する。

「??1000クレジット」

案の定、ばりばりの初期金額だった。

まあ、ここは原作通りだから特に驚くことでもない。

「あのさ、もし良ければ——」

俺がお金を援助する事を提案するかもしれない、と考えたのだろう、キリトは慌てて首を振り、会話の流れを自分が思い浮かぶ他の解決法へと持っていった。

「どこか、手っ取り早く稼げるような場所って無いか？ 確か、このゲームにはカジノがあるって聞いたんだけど」

「まあ、無いことは無いな。この店にも??つと、ほら」

俺は立ち止まり、俺も初期の頃に纏まったお金を稼がせていただいた例の弾除けゲーム『untouchable!』へと視線を向ける。??まあ、俺は最初からここを目指してきていたのだが。

キリトも歩みを止めると、少し興味深そうにその機体を見つめた。

「??これは?」

「あそこのゲートから、ガンマンの銃撃を避けながらどこまで行けるかってゲーム。触れりや今までプレイヤーがすぎ込んだお金が全額貰える」

「全額!」

驚くキリトを余所に、ほら、とガンマンの後ろの看板を指差す。看板にはキヤリーオーバーの表示があり、そこには40万を超える数値が載っていた。

??ん? 原作よりちよつと多くね?

原作では30万ちよいだったはず?!

いや、待てよ。もしかして、俺が一度クリアしてしまったから『俺も行けるんじゃないやね?』と考えて挑戦するプレイヤーが増えたのか。原作と違う金額だと装備同じにしにくくなるんだけどなあ。

「す、凄い金額ですね」

「あー??うん。難しいから」

クリアしてしまった手前、原作でのシノンのように「だって無理だもん」とは言えず、俺は言葉を曖昧に濁した。

??聞こえない。

私のアバターはスキル補正もあり視力はいいが、聴力はそこまでいいわけでも無い。感づかれないようになんか離れて尾行しているこの状況で、向こうの会話が聞こえようはずも無かった。会話はとても

大事なコミュニケーションツールである。それが聞こえないということは、楽しそうに談笑している二人の関係を探るにはかなり致命的ではあった。

ただ、会話が聞こえないなりにこの尾行中に気付いた点があるとすれば——あの女プレイヤーはこのGGOにおいて初心者ニュービーであること、くらいのものだ。

街を歩いている時も、興味深げに辺りを見回していたり、景色に圧倒されたり。このゲームをやり込んでいる人間ならばしないような動作を幾つかしていた。

まあ、その点があったところで、何故幸人クッキーが初心者を案内しているのかという疑問が更に浮上してくるわけだが。

それも私に隠して、である。今日の不可解な態度も、私をさつさと厄介払いしたのだろうか、と思うと、冷たい怒りがフツフツと沸いてきた。

まさか、とは思うが現実での知り合い、なんてことも??。

弾除けゲーム『untouchable!』をじつと見ながら何やら話し合っている2人を常に視界の端に捉えながら、私は周りに怪しまれない程度に適当な商品を見て回っていた。

クー達が見ているその間に、一人のプレイヤーがそのゲームへと挑戦し、案の定呆気なく失敗していた。

そしてすぐ後に、例の女プレイヤーが弾除けゲームの機体へと近寄った。

??まさか、傍から見るだけでも分かるような初心者にあんなインチキゲームをさせるつもりなのか。

しかし、その私の思考は、すぐに驚愕へと塗り替えられることになる。

キリトと買い物

簡単な実力のテスト。やる前はそんな風に考えていたのだが——
いざ目の当たりにしてみると、なるほどこれは

「??バケモノだわ」

まさに、バケモノ^{主人公}。

弾をよける動作に無駄がないのは当然として、状況確認からの判断能力が尋常ではない。咄嗟に下す判断が全体的確で、それはもう超反応といっても差し支えはないだろう。流石に原作内最強の黒の剣士とあって、容易に自分が思い描いていた限界を超えてくる。これに対して互角レベルで張り合う新川^死兄^銃とかホントに人間なのか疑うレベルだ。

弾除けゲームのクリアに沸いていた店内が収まり出した頃、俺達2人は武器シヨップの一角で、キリトの主装備を決めるためにあれやこれやと話を交わしていた。

「うくん??。このアサルトライフルつてのがサブマシンガンより口径が小さいのに図体が大きいのはどういう訳なんだ?」

「貫通力やら命中精度やらなんやらの問題だな。まあ、基本的に俺は理論より実践派だから詳しい事は特に覚えてない。そこら辺には期待しないでくれ。??で、良さそうな銃は見つかりそうか?」

「??いや」

俺の質問に、キリトは苦笑いを浮かべた。まあ、銃の事をろくに知らない人間が自分に合ったものを選ぶなんて運命なんてことを除けばほぼ間違いなく無理だ。俺のガバメントも結局最近はろくに使っていない。

「??これは??」

遂にシヨーケースの端まで辿り着いたキリトが、一つの商品を指さした。銃とは明らかに異なる、金属の筒。

「光の剣と書いて光剣。正式名称は『フォトンソード』」

「剣!? この世界にも剣があるのか」

キリトが慌ててシヨーケースに顔を近付ける。

「かなり扱いにくい武器だけどな。大抵が近付く前に蜂の巣になるから主装備にするには心許ない」

「??つまり、接近できればいいわけだな」

「それが出来るならな」

俺がそう言うが早いかキリトはニヤリと笑うと、既にフォトンソードを購入していた。原作と変わらず、判断が早い。とんでもない速さで飛んできたNPCが差し出したパネルに右掌を押し当てる。そして実体化された黒いフォトンソードを手に取り、体の前にかざした。スイッチを入れると同時に、ぶうんと音を立てて実体を持たない光の刃が辺りを照らす。

キリトは光剣をまじまじと見つめた後、剣を振り、SAO時代のソードスキル《バーチカル・スクエア》を繰り返した。ブオン、ブオンとまさにスーウオズのアレのような音を鳴らしながら光剣が振られ、空中へと軌跡を描く。

「??ふうん」

俺は腕を組みながら、微かに目を細めた。

反射神経はともかく、剣を振る速度はそこまでバケモノじみているという訳では無い。勿論、これがキリトが出せる最高速度だ——という事は無いのだろうが。

この感じなら反応は出来る。

俺は安堵で胸を撫で下ろすとともに、目の前の少年へ向けて賞賛の拍手を送った。

「??さて、お金は後どれくらい残ってる?」

エントリーを締め切るの3時までそう時間も無い。今からは、キリトの装備をさっさと整えるのが先決だろう。

「あの子、どういう反射神経してるの??」

幸人と一緒に行動していた女プレイヤー。明らかに初心者にしか見えなかった彼女が、インチキと言っても過言ではない弾避けゲーム

に入っていた時はそれを許した幸人の神経を疑った。だが、実際に彼女がそのゲームをクリアして見せた事で、私の疑問はなお増えることになった。

即ち、彼女が何者か——である。

最後のレーザーを避けた反射神経。あの距離だと、弾道予測線バレット・ラインと実射撃の間にタイムラグなんて殆ど無いはず。それを回避してみせたということは、幸人のように弾道予測線に頼らない回避ができるという事だ。

今のを見て、私は確信した。

彼女は強い。

このゲーム自体は初心者なのかもしれないが、他のゲームで戦闘経験をしつかり積んできているのだ、と。

もしかしたら、幸人は彼女を今回のB o Bにエントリーさせるのかもしれない。??いや、きつとそうするために私と同じタイミングではエントリーをしなかったのだろうか。

「??」

だが、それでも。

私よりあの子を優先する理由は何なのかを知りたい。

私はその一心で、幸人たちへの尾行を続けた。

??別に、嫉妬している訳では無い。ただ、敵になる可能性がある彼女の情報を、なるべく手に入れておきたいだけだ。

この後、仲良さそうに話す2人を見て、自分でも理由が分からないまま心の中がもやもやしてしまうことになるのだが。

シノンとの遭遇

原作とは違い、増えた金額分少しキリトの装備を強化しておいた。当然武器ではなく、防具の話だ。銃をもう少し強化した方が良いかも考えたが、キリトの銃が活躍するのは精々牽制と死銃戦の時の数発だけ。《FN・ファイブセブン》でも十分仕事を果たすことが出来るだろう。

結局、店を出たのは14時半に差し掛かろうという時間帯。小まめに時計を確認していたお陰で、バギーに乗らなくてもエントリーには間に合う時間に出ることが出来た。

「じゃ、さっさと総督府行ってちやつちやとエントリー済ませちやうか」

「??何から何まですつかりお世話になっちゃったな。どうもありがとう」

「どういたしまして。まあ、俺も予選が始まるまでは暇だったし。困った時はお互い様だろ」

キリトと話しながら、総督府へと向かって少し急ぎめに歩いていく。BOBに対するキリトからの質問に答えたり何だりしている内に、総督府に到着したのは14時50分過ぎだった。

入口から総督府の内部に入ると、右奥の一角にずらりと並んでいるタッチパネル式端末へと近付く。

「これでエントリーするんだけど操作のやり方、大丈夫そうか？」

俺が首を傾げると、キリトはこくんと頷いた。

俺もそう悠長にはしていられない。パネルで仕切られた隣の端末へと向かい、一応端末情報を他人では見れないように設定しておいてから、各種データの入力を行っていく。特段モデルガンなどが欲しい訳では無いが、これで貰えるGGOの装備などたかが知れている。そのため、一応——という事だ。

俺の持っている原作知識の中で、運営側がそう言った個人情報を利用して行う事は無かったため、そこに關しては特に心配していない。

画面が切り替わり、エントリーを受け付けた旨の文章と、1回戦の

時間が表示された。

隣で何やら——恐らく住所を入力するかしないかでしばらく迷っていたのだろう——唸っていたキリトへと、終わったか、と問い掛ける。

「ああ、なんとか。ほんとに、何から何までありがとう。助かったよ」「どういたしまして。それより、予選のブロックは？」

「えっと??Fブロックだ。Fの37番」

「俺はFの12??だから当たるとしても決勝か。それにしてもマジかあ??」

こんな所で、原作再現の恐ろしさを再確認した。

まさか、ブロックだけではなく番号までもが原作のものと同じとは。なお、シノンのブロックはBで、俺達が当たるとしても本戦だ。

「マジか、つて?」

「あー??いや、こっちの話。まあ、でも良かった良かった。運が良ければ2人とも本戦には出れる」「?」

キリトは俺の言っていることがよく分からなかったのだろう、小さく首を傾げた。??見た目が普通に美少女で不覚にも見とれそうになったが鉄の精神力で何とか我慢。

コイツは男。コイツは男。

決勝戦にさえ進めば二人共が本戦に出られる旨をキリトに説明しつつ、エレベーターに乗り込む。予選の会場である地下20階へと着き、エレベーターの扉が開いた途端、キリトが俺の隣で息を呑む気配がした。

まあ、慣れていなければこのホールでの重々しい空気には圧倒はされるだろう。だがここで武器を見せているプレイヤー達は大した事の無い連中ばかり。興味を割くのもバカバカしい。

俺が特に感慨も持たずに控え室へと足を向けると、キリトは慌てて付いてきた。

個室である控え室に入り、壁にもたれ掛かりながら装備を変更するためにウィンドウを操作する。

「??す、凄い胆力してるんだな」

「んあ？ ああ、確かに最初は驚くだろうけど。そうビビるもんでもないぞ？ アイツらみたいなお調子者は大体予選で落ちるし」

「お、お調子者!! さっきのイカツイ人たちが!」

「大会の30分も前に自分の装備晒してる時点で対策し放題じゃねえか。キリトも武器は試合直前に付けるようにしとけ」

あ、ああ??とキリトは眩き、唾然としたように頷いた。まあシノンレベルで知られているプレイヤーだと隠したところで大体どこかからは漏れているだろうが。

防具をつけ終えた俺達は控え室から出ると、適当に時間を潰すためにボックス席へと足を向けた。

——しかし、5歩ほど歩いた後、俺の足は止まることになる。

「??」

「??」

目の前には、見慣れた水色の髪を逆立てて仁王立ちする氷の狙撃手様の姿があつた。

??あれ？

もしかして——何か怒ってらっしゃる？

シノンと誤解

何故怒っているのかは分からない。

分からないけど会ったからには挨拶をせねばなるまい。という訳で俺はシノンに向けて恐る恐る手を挙げた。

「よ、よう、シノン。そっちはBクラスだったか。頑張れよ」
「ええ」

会話終了。話を広げようにも広げさせてくれなさそう??と言うより、今のでなおさら怒りが増したまである。

昼間にシノンと別れてから、俺はシノンと接触していない。だから、俺が彼女に何かをした訳もなく。彼女の怒りの原因が全く検討もつかないのも当然と言えるだろう。

「エントリー、随分遅かったのね」

シノンが声に怒気をはらませながら小さく呟いた。背筋に冷たいものが走るが、逃げ出したくなるのをなんとか堪えて苦笑を浮かべる。

「や、ちよつとそこの人を案内しててさ」

「ど、どうも」

「??へえ」

シノンからの殺気が増した。と言うかさつきまで騒がしかった周囲のプレイヤーがシノンの殺気に当てられて滅茶苦茶静かになるんですが。

その分遠巻きにこちらを見つめる視線が増え、他人の無遠慮なそれにシノンの機嫌が尚傾く。

「じゃ、そういう事で?」

一刻も早くこのシノンから離れたい。その一心で、俺はなるべくシノンと目を合わせないように、視線を下げながら彼女の脇を通り過ぎようとした——のだが。

「待ちなさい」

シノンに引き止められる。泣きそうになりながらも彼女へと視線を向けると、彼女は顎で奥の方にあるテーブル席の一つを指し示し

た。あそこで話がある、という事らしい。

「しようがない。??キリト、悪いが案内はここまでだ。決勝で会えることを期待してる」

「お、おう。そっちも色々頑張れ」

キリトと声を潜めてやり取りを交わし、無関係な彼を巻き込むわけにも行かないので、そつと別れようとする——

「そのアナタも一緒に来てくれるかしら」

キリトも逃がすまいと問答無用でシノンはそう言い放った。何でだ。シノンはキリトとまだ面識は無いはずだが、俺の知らない何処かで会っていたのだろうか。

??いやそれキリトがシノンに既にフラグ建築済みとかいう可能性出てきたぞおい。

それはマズい。本当にマズい。ここ最近は何とかキリトとシノンを会わせない為に動いてきたというのに。その苦労が水の泡になりそうだ。

まさか怒ってるのもしや俺ではなくキリトに——!?

俺の嫌な予感是否応なしに広がっていった。

ああ、イライラする。

自分が何に苛立っているのかは分からないが、とにかく胸の中がモヤモヤしっぱなしだ。

彼女——キリトというプレイヤーらしい——と一緒に買い物をしていたのは??まあ納得は出来ようも無いが理解はできる。しかし、仲良く控え室に行き、あまつさえ一緒に着替えてきたのを見てしまったのは、私にも我慢の限界が訪れてしまったのだ。

着替え。幸人が、女の子と、個室。

先程まで楽しく歓談していた二人組のプレイヤーが私を見て慌てて口をつぐんだ。

後ろを歩くクーへと少し視線を向ける。彼は何を考えているのか、

ブツブツと何事かを呟きながら冷や汗を流していた。

耳をすましてみれば、『好き』だの『キリト』だの『シノンには会わせないようにはしていたのに』だのといった言葉を何とか拾うことが出来た。

単純に繋げてみれば——酷いことになった。

「??」

幸人がそんな人物ではないと自分が一番知っているはずなのに、どうしても悪い予感が脳裏にチラついてしまう。

別に私と幸人は交際をしている訳では無いため、どんな女の子と行動していても、文句を言う権利なんて存在しない。彼が明らかに騙されていたりする場合はそれを止めるだろうが、それ以外の場合で、私何かを言う理由なんてないのに。

無いはず、なのに。

「??」

一番奥のテーブル席へと座った。

先程まで静まり返っていた周囲の喧騒が、徐々に戻ってくる。

キリトと名乗る女性プレイヤーと、幸人が私の前へと座った。必然、幸人と彼女は隣に座ることになる。そんな些細なことにも苛立ちを覚えてしまい、私は気持ちを切り替えるために深呼吸を繰り返した。

緊張のためか、背筋を伸ばしている幸人へと視線を向け、その言葉を放つ。

「クーとその女の子って、どんな関係なの??？」

「??へ？」

幸人が間の抜けた声を上げた。まさか、他に何か聞かれるとでも思っていたのだろうか。

だがそんな事に意識を裂いて、彼の言うことを聞き逃してしまうわけにもいかない。私の真剣な視線に気付いたのだろう、彼はバツが悪そうに目を逸らし、ポリポリと頬を掻いた。

彼の隣で、キリトが静かに人の悪い笑みを浮かべたことに気づく人間は、そこにはいなかった。

「??いや、何を勘違いしてるのかは知らないけど、コイツは男で——」
「??えっ?」

キリトが、多少作ったような声を上げて首を傾げた。
しかし、すぐに「ああ」と小さく頷き、

「そうでしたね、そういう事にしておく約束でしたね」
『なっ?!』

私と幸人の声が被る。

それは、一体、どういう、意味で——

それと同時に、荒々しいエレキギターによるファンファーレがドーム内に轟き、甘い響きの合成音声が、私たちの頭上に大音量で響き渡った。

『大変長らくお待たせしました。ただ今より、第三回バレット・オブ・バレッツ予選トーナメントを開始いたします。エントリーされたプレイヤーの皆様は、カウントダウン終了後に、予選第1回戦のフィールドマップに自動転送されます。幸運をお祈りします』

ドーム内に、盛大な拍手と完成が沸き起こった。

だが、そんな事よりも大事なことが目の前で起きている。キリトの言ったこと、その意味を呑み込んでしまった私は、呆然とその場に立ち尽くしていた。

進行していたカウントダウンがゼロになり、固まる私たちの体を青い光の柱が包んだ。そして、それはたちまち視界の全てを覆い尽くした。

シノンと予選

1回戦を早々に終えた俺は、キリトの発言の真意について考えていたのだが——やはり、アレはどう考えても嘘だ。

ネームカードの交換をした時に、その間違いが無いよう念入りに確認したから、あんなアバターでもキリトが男だということはもう間違えようのない事実なのだ。

つまり、キリトのあの爆弾発言はキリトが”何故か”吐いた嘘なのだ——何故か等考えるまでも無いだろう。

よくよく思い出してみると、キリトは原作でもシユピーゲル相手に誤解を広げるような台詞を放っている。

今回もその類のものだと思つて、まず間違いは無いはずだ。??無いはず、なのだが。

「上手い解決策が見つからない??」

誤解を解くにはキリトが男であるという事実を信じてもらうしかない。しかし、キリトがああ言つてしまった以上、ただそう伝えるだけでは逆効果になりかねない。

つまり、キリトが男であるという物的証拠を見せるしかないわけだ。

残念ながら、GGOには自分以外のプロフィールカードを他人に見せるという行為が出来ない。そのため、物的証拠を出させるにはキリト本人を説得する必要がある。しかし彼があつさり協力してくれるかと考えても??はつきり言つて分からない。

そんな訳でキリトの第1回戦が終わるまでじつとモニターを見続ける。

彼は、慣れない銃器相手に苦戦しているようだった。とは言え、アイツが負けることなど原作通りのステータスならば有り得ないだろう。敵もおあつらえ向きに原作通り《餓丸》だしな。

この試合はもう少し掛かりそうだ。

次に、俺はシノンの試合へと意識を向け——ようとしたところで、

ちよいちよい、と肩を控えめに叩かれた。

振り向くと、金髪の優男が柔らかい笑みを浮かべてそこに立っていた。

「見てたよ、お疲れ様」

「よう、シュピーゲル」

手を挙げて応える。すると、シュピーゲルは突然真面目な顔になって顔を寄せてきた。余り聞かれたくない話らしい。それを察して顔を突き合わせると、シュピーゲルは小声で呟いた。

「そう言えば??さつき一緒にいた女の子とはどんな関係なの?」

コイツも見てたらしい。だがシノンのあの態度から話しかけるに話しかけられなかったのだろう。

まああのシノンめちやくちや怖かったからね。仕方ないね。

ガシガシと頭を掻き、取り敢えず彼の誤解を解くために口を開く。

「いやアイツ男だから。あんなアバターでも男だから」

「ええっ!」

シュピーゲルが素つ頓狂な声を上げる。近くにいたプレイヤー数人がこちらへと視線をやり、彼は少し恥ずかしそうに口を押さえた。

俺は苦笑いを浮かべ、そしてすぐ軽く肩を落とす。

「はあ??でもシノンには勘違いされちゃってさ」

と言うかキリトが勘違いを加速させちやった訳だけどネ。

シュピーゲルは先程のシノンの般若な姿を思い出したのか、ブルつと身震いをした。

「あんなに怒ったシノン初めて見たよ?」

「あんな刺々しいシノンは俺も初めて見た」

触れる物全て滅多刺しにするレベルの刺々しさだった。

シュピーゲルも苦笑を浮かべる。

「後でクーも謝つときなよ。あとしっかり説明もしてあげてね」

「おう、まあそうしてみる??つと、シノンの試合もそろそろ終わりそうだし、話を——」

そうして振り返ったところで、俺の体を光の粒子が包んでいくのに気付いた。

タイミングの悪さに、思わず溜め息。

とは言え、真面目な試合中に気を抜いて挑むわけにも行かない。深呼吸して意識を切り替える。

「じゃあ、行ってくるわ」

「うん、頑張つて」

次の相手はアサルトライフル使いだったはず。

そんなに名の知れたプレイヤーでは無いが、何気に第1回から参加している古参プレイヤーだ。

俺は脳内で彼に対しての作戦を練りながら、静かに転送を待った。

スコープを覗き、倍率を確かめる。800m先の敵をレティクルの中心に据え、引き金に指を掛けた。

中々冷静になることが出来ない。深呼吸を数回繰り返してみるが、やはり落ち着かなかつた。

先程からチラチラと頭に浮かんで消えていくのは彼女——キリトの発言の真意が何なのか、ということだ。もしク^幸の言うことが正しく、先の発言が彼女もとい彼の悪ふざけだったのならば良いが??もしそうではなく、キリトの言っていたことが真実なのであれば。

「——っ」

少し強めに引き金を引く。

ヘカトから放たれた弾丸は相手プレイヤーの脳天を盛大に貫通し、当然の如く彼のHPを削り切った。

クー対キリト I

特に問題も起きないまま、俺とキリト、そしてシノンはそれぞれ予選決勝へと駒を進めた。

結局、キリトやシノンと話すことも出来ないままだったのは悔やまれるが、死銃とキリトの遭遇イベントをすっかり忘れていた事に気が付き、アイツの精神状態が大丈夫かどうか心配だった俺としてはひとまず胸を撫で下ろす結果となった。

少し長く感じた転送時間を経て瞼を開ける。

ステージは何というか??ある意味予想通り、《大陸間高速道》だった。準決勝が《曠野の十字路》で、敵プレイヤーが《スティングァー》であつた時点で大体これも予想はついていた。

と言うかここまで一致するとランダムって何だっけってレベルだ。前準備は楽で済むが、一人不正をしている気分になってどうも落ち着かない。

適当にぐるりと視線を向け、自分の位置を再確認してみる。真後ろには何も無い——というより、そこはステージの最東点である。これより後ろに行くことは出来ないという訳だ。目の前には幅100メートル、そしてあれやこれやと障害物だらけのハイウェイが広がっている。

「さて、どうするかな」

相手を探して走り出すことも、何処かに隠れて待ち伏せることもせず、俺は静かに空を見上げた。

1対1の試合でここまで気を抜くのもどうかと思うが、キリト側にする気がないのは既に知っているので特に問題は無い。

シノンほどキリトとの決着を切望しているわけでもない俺は、何となく冷めた気分になっていた。勿論、キリトと1戦交えてみたいという気持ちはある。そのためにALOでリーファと特訓をしたりもした。

だが、相手のやる気が無ければそれも無意味というわけで。どうしようか。

テクテクと無防備に歩きながら、俺はキリトと戦うために色々と思案を巡らせた。

やがて、彼の姿が夕日の中に浮かび上がった。

試合中とは思えない、何とも無防備極まりない姿。どうぞ撃ち殺して下さいと言わんばかりだった。

実際、目の当たりにしてわかった。これを真面目な試合だと思つて臨んでいた場合、その相手プレイヤーは確実にキレル。うん、絶対。シノンがキレて詰るのも当然だわ。

「ええつと???もしもし?」

しかし、こうなることを予め知っている身としてはイマイチ全力で怒る気にもなれなかった。

俺の声に、キリトは驚いた表情を浮かべて顔を上げた。自分が撃たれることは想定しても、話し掛けられる事は想定外だったらしい。だが、すぐに視線を逸らすと、感情を込めない声で小さく呟く。

「俺の目的は、明日の本戦に出ることだけだ。もうこれ以上戦う理由はない」

これも、原作と全く同じセリフだった。

しかし、分かっていたはずなのに、これには少しムツとしてしまった。自分でも理由が分からないまま、言い返す。

「じゃあお前と戦うつもりで色々準備してた俺がバカみたいじゃん。どうすんのさこのやる気」

ずっと口を出た言葉は、俺の飾らない本心だった。

言葉を放つてからその意味が自分自身に返ってくる。

そう、俺はコイツと戦いたいのだ。だから色々準備もした。それにシノンと一緒にエントリーもしなかった。??別にシノンとキリトを会わせないだけならば、一緒にエントリーをしておいても良かったのに。

気付けば、先程までの冷めた気持ちは何処かへ消えていた。抑えきれない興奮のようなものが俺の言葉を紡ぐ。

それは実に自分勝手な、1人のゲーマーとしての願望だった。

「俺はお前と全力で戦って勝ちたいんだからさ」

「??」

キリトは俺の本心を探るように俺を数秒見つめ、やがて深く息を吐いた。

「??そうだな。俺が間違ってた」

顔を上げ、俺を真っ直ぐに見て、彼は小さく呟く。

「クー。今から俺と勝負してくれ」

ぞくり、と背中を冷たい戦慄が走る。

そう、これだ。コイツのこの表情が見たかったんだ。

「つて言ってもこんな距離じゃしようがないよな??決闘スタイルで——」

「いいや、剣で大丈夫だ」

キリトの言葉を強引に遮り、手を振ってウインドウを出すと、俺は自分の光剣である《ムラマサF9》を実体化させる。キリキリとダイヤルを回すと、光の刃が灰色の筒の先から現れた。ダイヤルを目一杯回し、刀身の長さを最大である100センチ強まで伸ばす。

さしものキリトもこれは予想外だったらしく、目を丸くしていた。見た目は美少女なので謎にキュートな所作である。

「お前、それ??」

「俺が光剣を使わないなんて言った覚えはないぞ」

コレなら問題無いだろ？

そう言って小さく笑うと、キリトはふっと表情を緩めた。

「ああ、そうだな」

キリトが光剣を構えた。隙のない、しかし余計な力が入っていない独自のスタイル。

それに合わせて、俺も構えを取る。

睨み合いが数秒続き——先に跳んだのは、キリトだった。

それは、この銃ガンゲイル・オンラインと疾風の世界において、とても異常な戦闘だった。光の刃が描く軌跡がぶつかり合い、混じり合い、複雑な模様を空中

に映し出していた。

もう他の予選は殆ど終わり、モニターに映る試合は残りたった三つだけ。その中でも、この試合は特に観客の注目を集めていた。

それもそうだろう。

銃の世界で、誰が好き好んで剣同士での戦いをするだろうか。

しかし、2人はそれを行っていた。傍から見ても相当に高度な近距離戦闘。今のところクーが押されているが、それも致命的なレベルではない。

いや、押されていると言うより、クーの戦い方自体が守りに偏っている、と言うべきか。

光剣に光剣を合わせ、弾き、流す。

彼の戦い方は、何かを守ることに特化したようなそれだった。

「キリトちゃん、少し不味いかもな」

「あん？ 何でだ」

ふと、私の隣のテーブルで中継モニターを見上げていた二人の男性の会話が耳に届いた。その片方、ゴツイ顔をした男のアバターが、ガリガリと頭を搔く。

「使ったことある奴しか知らんとは思うが、光剣同士で斬り合うと猛烈な勢いでエネルギーが減るんだよ。結構打ち合ってたから、もうエネルギー残量は心許ないんだろうな」

「へえ——いや待て、それじゃキリトちゃんヤバイじゃねえか」

「だからそう言ってるんだろ。まさかあの野郎相手にあんなハンドガンお1丁ちやで勝てるとは思わねえし。??おつ、あの子もそれに気付いたみたいだぞ」

その言葉にモニターをよくよく見ると、いつの間にかキリトの攻める手が緩まっていた。

キリトが光剣同士を合わせることが嫌い、攻め方を変えたのだ。苦い表情から分かるように、この状況は彼女にとって本意では無い。

この状況を打破できるとすれば『予備のエネルギーパックを空のものに入れ替える』と『エネルギーが切れるまでにクーを倒す』なのだが、どちらも現実的では無いことは明白だった。

「これは、クーの勝ちで決まりだな」
そう男性アバターが呟くのが聞こえた。

クー対キリト II

そこでは一瞬も気を抜けない攻防が繰り広げられていた。攻防??
と言っても、基本攻める方と守る方は決まっているのだが。無論、キ
リトが攻撃し、俺が守る。

俺の剣技はALOでの経験もあり、守ることに特化していた。だからこそ、彼の高速の剣技に何とか食らいついていけている。

相手の体の動きから剣の軌道を予測し、実際に初動を見て確認し、その軌道に合わせるように剣を振るう。秒間何十発もあるものもある銃の連射の回避と比べれば楽な部類であるとは言え、それでも気を抜けば彼の剣が俺のアバターを切り裂くことは容易に想像できた。

時折フェイントのように混ぜてくる直接攻撃もすんでのところではないし、逆に隙を見つければこちらから打ち込んでいく。まあ当然のようによけられるのだが。

やがて、こちらへと攻撃を続けるキリトの表情に、焦りが見え始めた。

光剣のエネルギー残量が心許ないのだろう。途中から剣を合わせることが可能な限り避けてきていたが、それでもこんな近距離で戦闘をしていれば必然的に剣を合わせる機会が多い。

キリトの光剣のエネルギー切れを突いて勝利する。これは俺にとっても本来望んでいた決着の付き方では無いのだが、予想していたよりも彼の剣戟は苛烈で——俺は防戦一方になるしかなかったのだ。

原作ではPVPの勘が鈍っている、などとキリト目線で言っていたが、これで鈍っているなら全盛期はどんな化物だったんだろうか。やだ怖いこの主人公。

とは言え、エネルギーパックを交換するために下がれば誤魔化しようのない隙は生まれてしまうし、この攻防を続けていてもキリト側が不利なままなのは変わらない。

??だが、これで終わりじゃない筈だ。

キリトの透き通った瞳から、些かも衰えない闘志を肌で感じる。このまま行けば俺が明らかに有利なはずなのに、ピリピリとした緊張感

が張り詰めていた。

何が来ても、対応してみせる。

そんな心意気で、俺はキリトの動きそのものへと全意識を集中させていった。

そして——ついに光剣のエネルギーが底をつき、刀身が短くなり始めた、その時だった。
キリトが二本目の剣を抜いたのは。

その瞬間、映像を見ていた誰もがキリトの左手にもう一本の剣を幻視した。私はその幻影の余りのリアルさに数度瞬きを繰り返し、ようやく現実を認識できたほど。それ程までにキリトのその《装備していない二本目の剣を背中から抜き撃ちする》というフェイントモーションは真に迫っていた。

それをなまじ良すぎる反射神経で迎撃しようとしたクーは大きな隙を晒し——そしてその隙を見逃すキリトでは無い。

短くなり、もう50cm程になった光剣だったがそれでもクーの体力を削りきるには十分すぎた。

肩口からバツサリと斬られ、体力が無くなったクーのアバターが霧散し、やがてステージの空中に勝者を称えるフォントが浮かび上がる。

モニターを見上げていたプレイヤー全員が、目の前で起きた事についていけず、呆然としている中。

第3回BOB予選Fブロック決勝はキリトの勝利で幕を閉じたのだった。

新川の考え

予選決勝戦を終えた俺はそのままログアウトせずに会場へと戻ってきた。もちろん、詩乃に真実を伝えるために。

その証明の為に転送地点付近でキリトを待っているのだが――

「アイツ、そのままログアウトしやがったな???」

数分経つても戻ってこない。仕様上キリトがここに戻ってくるのは大体俺と同じタイミングのはずなので、彼がここにいない理由はただ一つしか考えられなかった。

そう、予選が終わると同時にログアウトを選択したのだ。

爆弾投下しておいて自分は逃げ出すとか酷くないですか。

とは言え、いくら嘆いても彼は戻って来ない。今頃ログアウト先の病室で美人のナースさんと何かお話でもしているんだろう。何それズルイ。

溜息をつき、何はともあれもう一度弁明はしておくべきかと思慣れた目立つ水色の髪を会場内に探し、辺りを見回す。

だが、俺が見つけたのはこちらへと走り寄ってくる銀髪シユピーゲルの優男だった。

「お疲れ様！ 決勝戦は残念だったけど、本戦進出決定おめでとう！」

「おう、サンキュー」

笑ってそう返す。しかし、既に俺の意識はシユピーゲルではなく会場にまだいるだろうシノンを探すことへと向かっていた。

それに気付いたのだろう、シユピーゲルは困ったように苦笑いを浮かべた。

「えっと??シノンならさつきログアウトしちゃったよ」

「さつき?」

「うん。クーの試合が終わったのほとんど同じくらいに」

「そうか??」

軽く肩を落とす。この調子だと詩乃の誤解を解くのがかなり先になつてしまいかねない。そして、誤解というものは解くのが遅くなれば遅くなるほど拗れてしまうことが多いのだ。

「どうするかなあ」

小さく呟き、軽く思考を巡らせる。真実を伝える方法がキリトのプロフィールカードをシノンに見せる、という事くらいしか浮かばない以上、誤解を解くのはゲーム内では不可能なのだが——2人ともが次、同時にログインするのは本戦直前しかない。

??無いのだが、シノンは大事な試合の前には基本精神集中のために個室にこもりきりになるので、はつきり言ってチャンスが何処にも見つからない。

他の方法がないか、と色々考えてはみるものの、特にいい案が思い浮かばない。

一人唸っている俺の耳に飛び込んできたのは、シュピーゲルの小さな呟きだった。何分声が小さかったもので、内容は一部しか聞き取れなかったが「??いい機会なのかも」とだけ聞こえた気がした。

「シュピーゲル、いい機会って?」

「ううん、何でもない」

俺が聞くと、シュピーゲルはそう言って笑ってみせた。

「あ、そうだ。ねえ、クー」

そして、彼はその柔らかい表情のまま、俺だけに聞こえる声量に変えてこう続けた。

「僕、明日朝田さんに告白しようと思うんだ」

「??は?」

謝るためにだろう、クーは自分と話しながらも彼女の姿を探していた。

傍から見ている分には小さなすれ違い。だが、今の二人の状態を見ていると、これが致命的な何かへと発展してしまいそうで少し怖さを覚えた。

でも2人は——本人達に言っても否定するだろうが——頑固だから関係を元に戻すには彼らだけでは難しいだろう。

いや、元に戻すだけではダメだ。僕が安心する為にも、彼らには収まるどころに収まって置いて欲しい。

BOB本戦が始まってしまえば、もう僕は本格的に後戻り出来ない。どうやら工藤くんは何かに気付いている節があるし、僕もこの計画死統計画がずっとバレないまま行けるとは思わない。

だからなるべく早く、彼らに付き合ってもらいたい。そのためには僕が一芝居打つしかないだろう。それに、自分の中途半端な気持ちにも、ケジメを付けておきたい。

「だから、これは二人の距離を縮めるいい機会なのかも」

一人呟く。その時、頭の中では工藤くんと朝田さんの関係を進めるための計画を練っていた。

そして、僕はクーにだけ聞こえる声量に変えて

「僕、明日朝田さんに告白しようと思うんだ」

そう言った。

詩乃と新川

自宅のアパートからほど近い、小さな児童公園。

私は新川くん呼び出され、ここへとやって来た。遊具二つに小さな砂場が一つだけのうら寂しい場所だからか、日曜日にも関わらず遊ぶ子供の姿は無く、この公園にいるのは私たち2人だけだった。

片側のブランコに座り、ぼうつと空を見ていた新川くんは、私の姿を見つけるとゆっくりと立ち上がった。

私も少し急ぎ気味に彼の元へと向かう。

「おはよう、朝田さん。ごめんね、本戦を控えてるこんな時に呼び出したりしちやって」

「ううん、良いよ。それよりも大事な話って??なに?」

急かすようにして申し訳ない気持ちはあるが、早めにGGOに潜ってコンディションを整えたい私としては、なるべく話は早く終わる方が有難い。

新川くんは苦笑いを浮かべて、頬を搔いた。

「??うん、そうだね」

それじゃあ、言うね。

そう前置きしてから、新川くんは予想だにできなかった言葉を口にしたのだ。

「朝田詩乃さん、あなたが好きです。僕と付き合ってください」

「??え?」

数秒、思考が止まる。彼の言葉の意味を理解するのに、ある程度の時間を要した。

新川くんが——私のことを?

「何で???」

真っ先に口をついたのは、そんな、どうとでも取れるような単語だった。

何で、私のことが好きなのか。

何で、そんなことをB O B本戦の直前である今、言うのか。

そんな私に、新川くんは真面目な表情で答えた。

「朝田さんは、いつもクールで超然としててさ。とつてもかっこよくて??強いんだよ、すつごく。朝田さんのそういうところ、ずっと憧れてた。僕の理想なんだ、朝田さんは」

新川くんは静かに、噛み締めるように呟く。まるで、懺悔のように。

私が、強い???

いや、私は強くなんかない。いつも、隣にアイツがいてくれたから。安心できる居場所があったから余裕が出来ていただけだ。

しかし??それも今は。

眉を伏せ、顔を俯かせる。微かに、声が震えた。

「私??強くなんか無いよ。君も知ってるでしょう。銃とか、見ただけで、発作が??」

「シノンとは違うじゃない。あんな凄い銃を自在に操ってさ??僕、あれが朝田さんの本当の姿だと思う」

違う、と反感を覚える。私の本当の姿は、ずっと前から心の中で救いを求めている、弱い私なんだ。

「きつと、いつか、現実の朝田さんもあなれるよ。僕に出来ることがあったら、何でもしてあげる。だから??」

違う。私が本当に求めているのは――

そこまで反射的に考えて、気付く。私が本当に欲しかったものに。今までの関係が心地よすぎて、それを変えないようにと気付かないフリをしていた、その気持ちに。

「僕と、付き合ってください」

そう、頭を下げた新川くんは、暫し時間を空け、私も頭を深く下げた。

「ごめんなさい。新川くんの気持ちは嬉しいと思う。??でも、私は君とは付き合えない」

顔を上げると、新川くんは少し困ったような、しかしそれでいて優しさを感じさせる笑顔でこちらを見ていた。

「理由を聞いても、いいかな」

多分、新川くんは分かっている。1番私たちのことを近くで見ているんだ。振り返ってみれば自分でも分かりやすいと思うようなことに、気付かないはずがない。

でも、私の答えが聞きたいと、彼は言っている。

「私は――」

そこで止めて、一度息を深く吸う。これを口に出したら、もう止まらない。

いや、もう止まる必要なんて、無いんだ。

「私は、幸人が好き。??だから君とは、付き合えない」

「??うん」

「ありがとう。新川くん」

頭を下げると、彼は静かに首を振った。

「僕は朝田さんに告白しただけだよ。お礼を言われるようなことなんて、何もしてない」

言葉の終わり際が何かを堪えるように震えたが、私はそれに気付かないフリをした。私は彼の想いを拒絶したのだから、慰めを言う権利なんて有りはしない。

「本戦、頑張ってるね。応援してる」

そう言って、私の返事を待たずに新川くんは踵を返して早足で去っていった。その際、目尻に浮かんでいた雫に、私は気付かなかった事にするしか無かったのだった。

クーと本戦開始

星のない夜空を『Bullet of Bullets3』のホロネオンが尾を引いて流れていく。

いつもはあまり人気のないエリアである総督府タワー前の広場も、今日に限っては無数のプレイヤー達が詰めかけて飲み物食べ物を手に大騒ぎする場になっていた。

アルコールなんて無いはずのこの世界においても空気のみで酔うような猛者もいて、そんなプレイヤーがトラブルを起こすなんてのもままあることだ。

特にもうすぐ始まるBOB本大会を対象にしたトトカルチョの胴元である『公式ブックメーカーNPC』や、それに関する情報売る胡散臭い予想屋の周りはこの時間からすごい人だかりになっている。

今この広場ではGGO内に存在する通貨の半分以上が飛び交っていることを考えれば、この盛況っぷりは当然とも言えることではあるが。

「キリトとシノン、あとは保険で俺に掛けときや確実に大儲けかな?」
そう零しつつも、胴元NPCの元へは向かわない。

広場の隅に置いてあるベンチに座り、俺はとある人物が広場を通るのを待っていた。——とある人物と言っても普通にシノンの事なんだけどね。

誤解は解かなきゃいけない、そう考えてるのに何も上手く行かない。今だって、シノンを見つけた後に何を話せば誤解が解けるか、ずっと頭を捻っているのに良い案なんてきっぱり出てこなかった。

それに、昨日新川が言っていた『告白』についても、結果的にどうなったのか、情報は全く入っていなかった。きつと断つたんだろうと考えるものの、本当にそうなのか、そして断つたとしてもその後新川が詩乃に何かしなかったか、と気が気でない。こっそり見に行くことも考えたが、流星にそんなことをすればこれ以上酷い亀裂が走ることになるだろうというのは想像に難くなかった。

そんな諸々が重なり、知らず知らずのうちに俺が広場を見ている目

は鋭くなっていたらしい。前を歩いていた初心者らしいプレイヤーが俺を見て引き攣った声を上げ、そそくさと去っていく。

「やあ、クー。今日はよろしく」

そして——そんな不機嫌な俺へと、涼しげなハスキーボイスが掛けられた。そちらへ視線をやると、キリトは普段通りの飄々とした態度で柔らかな笑みを浮かべていた。

俺は瞑目し、深い深い溜息を零す。

「どの面下げてそんな事が言えるんだよお前は??」

「え?」

「お前が撒いた火種のせいでどれだけ苦労してると思ってたんだ」

俺がそう言うのと、キリトはバツの悪い表情を浮かべた。

「あー??。それは、悪かったな」

「今日何処かでシノンと会ったら絶対に誤解解いておいてくれよ頼むから」

「お、おう」

これで何とかなるだろうか。いや、ならない気がする。

「なあ、クー。今ちよつと時間あるか?」

「まあ無いことも無いけど、どうした?」

「いや、色々と聞いておきたいことがあってな??」

アバターにすっかり毒されているのか、妙に女っぽい仕草で少し申し訳なさそうにキリトが顔の前で手を合わせた。

そうか。そう言えば、原作では本戦前にシノンから色々情報を得ていたはず。

俺という異物が入り込んでいるとはいえ、基本的にキリトの行動は原作に忠実な事を考えれば——

同じ情報を与えておいた方が、キリトの行動を予測しやすくなるだろう。

「しようがないな。折角だし付き合ってやるよ」

俺はそう言って笑った。

「何だよ?!」

遮蔽物が少ない砂漠地域。

シノンとキリトの遭遇地点である鉄橋と、地図上で見事に真反対のその地域に降り立った俺は、泣きそうな声で呟いた。

「何で毎回こうなんだよお?!」

第三回 B O B、本戦——開始。